
瑠璃とお菓子

くるひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃とお菓子

【Nコード】

N7254Y

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

皇太后陛下付きの一番年若い侍女は、亡き母に習ったお菓子作りが得意だった。彼女と泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下の、これから。

瑠璃と栗（前）

ルリの人生は、一度没落しかけた。

ルリの父は、大国グラディアトリアの名のある侯爵であった。

広大な領地を有し多くの領民を抱え、おかげで数ある貴族の中でも特別優雅を誇っていた。

母は正妻ではなく愛人の立場であったが、彼女は父を深く愛していたようだ。

しかし、やがて侯爵家は栄華に溺れ、領民に圧政を敷き始める。

溢れある財力にものを言わせて、王宮での発言権を増した父は汚職に塗れ、そういう輩が私利私欲で国政を食い荒らし、大国の内部はだんだんと腐敗していった。

そんな危機的状况を打開したのが、皇帝フリードリヒ崩御に伴い即位した、彼の第一子ヴィオラントだ。

銀髪と紫の瞳の絶世の美貌を誇る新皇帝は、成人を迎えたばかりの傀儡皇帝だとなめてかかろうとした古狸共をもの見事に返り討ちにし、その全身を血塗れにして王宮の腐敗の中を突き進んだ。

国政を乱し、領民を苦しめた罪で、多くの貴族が彼の手により首を刎ねられた。

その中には、ルリの父も含まれていた。

父は、領民に重すぎる税を課し、男達を私用の労働にかり出し、女や子供を飢えさせた。

それを諫める部下や陳情に訪れる領民の代表達を処刑するなど、数々の私刑も繰り返していた。

それらの深い罪を、命をもって償うのは当然のことかもしれない。当主を処刑された侯爵家は財産の全てを没収され、ある者は路頭に迷い、ある者は復讐と称して皇帝に刃を向け、彼の臣下に返り討ちにされた。

その時、ルリは六歳になったばかりだった。

もともと、愛人の子であるルリは父の屋敷に住まわせてもらえ
わけもなく、王城の近くに屋敷を与えられて母と二人で住んでいた。
しかし、当然父名義のその屋敷も没収の対象となった。

住む所を無くし、父からの生活費も途絶え、今や罪人となった侯
爵と関係したことで母方の実家からも干され、ルリと母も路頭に迷
うしかないかと思われた。

しかし、そんな母子に救いの手を差し伸べた人がいる。

亡くなった皇帝フリードリヒの正妃であり、新皇帝ヴィオラント
の義理の母、エリザベス皇太后陛下だ。

ルリの母は、もともとは彼女の侍女を務めていた。それがきつ
かで父に見初められ、ルリを生んだのだ。

母子の窮状を聞きつけた皇太后は、再び母を自分の侍女にと召し
上げ、王宮内に部屋を与えて二人を住まわせてくれた。

さらには、ルリに侍女見習いをさせる傍ら、一通りの教育まで受
けさせてくれたのだ。

それから九年後、母が病を患ってルリの成人を待たずに亡くなる
と、皇太后陛下はルリの後見を買って出て、翌年の成人の儀を母に
代わって心から祝ってくれた。

慈愛の溢れる皇太后陛下へのルリの感謝は計り知れず、好きな道
に進んでいいと言ってくれた彼女に対し、一生侍女としてお側にお
仕えさせて下さいと請うた。

彼女の側は心地よかった。侍女の先輩達も、姉のようにルリを気
遣ってくれる。

二の姫であるミリアニスは騎士となり、皇太后陛下の第一騎士と
していつも側にいたが、侍女のルリにも優しく接してくれた。

そして、時々顔を出すのが、ルリとは同い年の末の御子であるル
ドヴィーク。

彼は、ルリの父を肅清し、歴史に残る大改革を成し遂げて退位し
たヴィオラントの跡を継いで、十六歳で新たな皇帝となった。

さらに皇太后陛下には、隣国コンラートの王妃となった一の姫ア

マリアスと、もう一人。

夫であるフリードリヒの側室で、リュネブルク公爵家の一人娘マジエンタが生んだヴィオラントと同腹の子　クロヴィス・オル・リュネブルク。

マジエンタは彼を産み落とすと引き換えに亡くなり、心優しい皇太后陛下は、いわゆる愛人の子であるクロヴィスマでも我が子と変わらず深い愛情を持って育てたのだ。

リュネブルク公爵家を祖父より受け継ぎ、グラディアトリアの宰相となった彼は、一見穏やかで優しい紳士であるが、その瞳は冷たく厳しいと恐れられている。

時々名のある美女と浮き名を流しながらも、特定の恋人を持たないことでも有名であった。

彼も、そして退位しレイスウエイク大公爵となって王宮を出たヴィオラントも、やはり成人を過ぎた男性だからか、あまり皇太后陛下の元を訪れることはなかった。

しかし、ある時を境に、そんな皇太后の息子達が頻繁に彼女の私室に集まるようになっていた。

そのきっかけとなったのが、少し前に先帝ヴィオラントに嫁いだシユタイアー公爵家の令嬢であり、そんな貴重な存在である彼女は、ルリの目の前の地面に踞っていた。

「　スミレ様？」

その日、侍女頭から使いを頼まれたルリは、一人街に下りていた街の小さな雑貨屋の一つに、腕がいいと評判の細工師がいて、彼に頼んでいた髪飾りが出来上がったのを受け取りに行ったのだ。

ついでに他の店を自由に見て回ってきてもいいですよ、と侍女頭はルリを送り出した。

年頃の娘らしく街にショッピングに繰り出すわけでもなく、休日も一人王城の図書館で過ごすようなルリを気づかってくれたのかも

しれない。

そんな侍女頭のおせっかいに苦笑しつつ、せっかくだからと少し街をぶらぶらしてきたルリは、王城に戻ると真っ直ぐに後宮を目指して歩いていった。

普段は回廊を通るのだが、実は裏の庭を通った方が、城門からは近道なのだ。

そうして、緑の芝生を踏みしめて歩いていたルリの前に、突然彼女は現れた。

「スマレ様、如何なさいました？」

ふわふわくるくるの柔らかい髪は世にも珍しい漆黒の色。

瞳の色は、彼女の夫である先帝ヴィオラントと同じ、稀少な紫。

長い睫毛に大きな瞳、ちよんと小さい鼻と口は、シンメトリーの絶妙なバランスで配置された、誰しもが認める美しさ。

そんな文句なしの美少女は、ルリが慌てたように声をかけると、躊躇って足元に向けていた視線を彼女に向けた。

「あつ、ルリさんだ。こんにちは」

「っ……」

ピンクの頬をしたとびきり可愛らしい笑顔が零れ、鈴のなるような声がルリの名を紡いだ。

ルリは思わず息を飲む。侍女頭ならまだしも、ルリのような裏方の仕事がメインの侍女の名など、大公爵夫人が憶えてくれているとは思ってもいなかったからだ。

その思いがそのまま顔に出ていたのか、少女はクスクスと笑って言った。

「何度も皇太后様のところにお邪魔してるんだから、美味しいお菓子

用意してくれる人の名前くらい知ってるよ。ルリさんは、焼き菓子が得意なんですよ？ この前もらったくるみ入りのやつ、すっごく美味しかったー」

「あつ、ありがとう存じます！」

焼き菓子が得意なのは母だった。母の作ったそれを皇太后陛下が喜んで食べて下さるので、ルリも習ったのだ。

城の料理長にも負けないわつと、こつそり耳打ちして下さる皇太后陛下は、大切な客人にのみルリの菓子を提供する。

初めて訪れた時からルリの菓子を持て成されたこの愛らしい公爵令嬢が、皇太后陛下にとつてもグラディアトリアの皇族全員にとつても、特別に大切な存在であると、もう誰もが知る所だった。

「こんな所で、何を？ …… 大公閣下とご一緒ではないのですか？」

ルリが側に近づくと、レイスウェイク大公爵夫人スマレは、ぴよこんと立ち上がった。

ルリも大きい方ではないが、彼女はもつともつと小さくて、こちらをうかがう上目遣いは女であつてもドキリとするほど可愛らしい。年は二つ下の十六歳で、夫である大公閣下とは十二も離れていて、かのお方の奥方への溺愛はそれはそれは凄まじいと聞く。

よく一人でこんな所をうろろろすることをお許しになったな、と思いつながら問うと、スマレは「あのね」と上を指差した。

「その二階、クロちゃんの執務室なの。ヴィーは今そこで難しい話をしているから、退屈だから出てきちゃった」

「はあ……」

“クロちゃん”とは泣く子も黙る宰相閣下クロヴィス・オル・リユネブルク公爵、“ヴィー”は彼女の夫であるヴィオラント・オル・

レイスウエイク大公爵。

この可愛らしい少女にだけ呼ぶことが許された渾名を正しい名前に変換しつつ、ルリは上階を振り仰いだ。

「部屋から見える所にいるならいいって言われたから」

「そつでございますか」

「そしたら、ここに栗が落ちてたの」

「え？」

そついう彼女の掌を覗き込むと、なるほど大振りの木の実が握られている。

「この国では、栗は食べないでしょ？」

「そつでございますね。それは大抵、庭園に住まう動物の食糧や家畜の餌になりますね」

「ところがどっこい、これつては蒸したり焼いたりしたら美味しいんだよ？ 私の故郷では、秋の味覚として重宝されてたの」

「まあ……」

それはルリにとっては初耳だった。

とげとげのいがに包まれたその木の実は、確かにドングリなどと比べて大振りだが、人間の食用とはされていなかったのだ。

スミレはルリの見守る中、熟れて枝から落ちたいがを器用に木の棒で抉じ開けて、中に二三個仲良く並んだそれを取り出すと、掌の上に載せてまじまじと眺めている。

「スミレ様、この皮を剥いてから蒸したり焼いたりすればよろしいですか？」

「うーん、皮はとっても硬いからね。怪我しちゃうといけないから、まずは皮付きのまま茹でたらいいと思うよ。それでね、熱を入れて

から皮ごとナイフで半分切って、中身をスプーンでくり抜くとい
い」

ルリはなるほど頷きながら、少女の言葉に耳を傾けた。

大公爵夫人という立場ながら、スミレが料理に造詣が深いとい
うのは、特に後宮に仕える者の間では有名な話だ。

皇太后陛下の元を訪れる度に手作りのお菓子を差し入れ、それは
毎回彼女に仕える侍女達にも振る舞われる。

ルリも何度かご相伴にあずかり、その腕前が本物であることは疑
うべくもない。

しかも、元来甘いものが苦手で、子供の頃から菓子の類いを一切
口にしなかった先帝ヴィオラントが、彼女が作った菓子だけは躊躇
なく口に入れる。

そんな、様々な面において貴重で愛すべき大公爵夫人は、小さな
掌の上で木の実をころころ転がしていたが、突然自分のドレスの襟
元をちよんと引っ張ると、慎ましい膨らみの中にそれをばいばいと
放り込み始めた。

「スツ、スミレ様！ 何をなさいますっ!?!」

「持って帰って蒸そうかと思つて。でも、この服ポケットないんだ
もん。手に持てるのなんて限られてるし……」

「いけませんっ！ そんな所に入れてはなりませんっ!」

驚いたルリは無礼も忘れ、彼女の小さな手を掴んでやめさせると、
慌てて懐から取り出したハンカチの四方を合わせて結びつけ、即席
の手提げ袋を作り上げた。

その中に、拾い上げた木の実を詰めてやると、スミレはルリを見
上げてにこりと笑う。

「ルリさん、ありがとう」

その笑顔を向けられると、何だか彼女が何をやってをもを許してしまいそうな気がして、かの先帝陛下がこの小さな奥方を目に入れても痛くないほど溺愛しているのも、ルリはひどく納得がいった。

そうして、ひとしきり栗を拾い集めて袋がいっぱいになると、いがを棒で小突いていたスマレがひよいと上を見上げた。

彼女は、宰相の執務室であるという二階の窓を見つめ、しばしの間何やら考え込んでいたが、おもむろに実が詰まったままのいがを一つ掴み上げた。

それを見たルリは、柔らかな肌を棘が傷付けるのではないかと焦ったが、ふんわりと丸めた掌で器用にいがを包み込んだスマレは、「さすがに、いがはまずいか」とぼつりと独り言を漏らすと、その中から実を一つだけ摘み上げた。

そして、大きく腕を振りかぶつたと思ったら、「えいやっ」と、それを件の二階の窓めがけて放り投げたのだ。

「……!？」

「おー、入った入った」

絶句するルリを尻目に、狙い通りの場所に放り込むことに成功したらしいスマレは、得意げに胸を張った。

「スマレか？」

それに対し、二階の窓から降ってきたのは、穏やかな低い美声だった。

思わず振り仰いだルリの目に飛び込んできたのは、陽の光に透ける絹糸のような白銀の髪を携えた美貌。

記憶の奥にこびり付いた畏怖に、ルリは知らずに息を呑み身を強張らせた。

先帝ヴィオラント　ルリの父の首を刎ねた張本人だ。

ルリ自身は、彼に対して恨みも憎しみも抱いてはいないが、母は皇太后陛下には深い恩義を感じつつも、死ぬまでずっとヴィオラントを怨んでいたように思う。母は、確かに父を愛していたのだから、恐れ多い男を前にし、慌ててルリは頭を垂れる。

対して、無邪気な様子で彼に手を振ったスミレは、楽しそうな声で尋ねた。

「ヴィー。今の、クロちゃんにヒットした？」

「したぞ。煮詰まっていた頭が真っ白になっている」

無表情と名高い美貌が、愛する奥方の前ではかすかに綻ぶ。

それをちらりと盗み見したルリは、無意識にほっと息を吐き出した。

可笑しそうな声色で妻に答えたヴィオラントが室内を振り返ったと同時に、がばつと彼の傍らから顔を出したのは、今度はその部屋の主たる宰相クロヴィスだ。

どうやら先程スミレが投げ込んだ栗は、見事に彼の頭に命中したらしい。

いつもはどこまでも涼やかで冷静な宰相閣下が、その眦をつり上げて階下の少女を怒鳴りつけた。

「こらっ、この悪戯娘！　窓にものを投げ込むんじゃないですよっ！」

自分が叱られたわけでもないのに、ルリは思わずビクリと竦み上がる。しかし、当の本人はというと、怒りのオーラを噴き出す宰相閣下に怯むことのなく、にこりと笑顔を返した。

「ちがうよー、私が投げたんじゃないよー。可愛い可愛いリスさん

が、そろそろお茶の時間だよって、仕事馬鹿な宰相様に教えてくれたんだよー」

「その堂々と嘘を吐き出す可愛い唇を摘んであげますから、さっさと上がってきなさい」

平気でデタラメを言う少女に対し、どこか諦めたようなため息をつきながら眉間の皺を手で揉んだクロヴィスは、ふと視線をスマレの傍らにいた侍女に向けた。

「そのあなた」

「あつ、はつ、はいっ！」

突然声をかけられたルリは、慌てて背筋を伸ばして返事をする。

若い侍女の初々しい反応にこっそり苦笑したクロヴィスは、向かいの兄ヴィオラントを何ごとか問うように見た。心得たヴィオラントがそれに頷いて返すと、彼は再び窓の下のルリに向き直った。

「あなたの仕事を増やしてしまつて申し訳ないですが、そこにいる私の義姉をここまで連れてきてはくれませんか」

「はい、私でよろしければ」

「すみませんね、よろしく願いますよ　ルリ」

「　　っ……！」

ルリは再び息を呑む。

まさか、若き皇帝を支えてグラディアトリアを統括する宰相閣下まで、ただの侍女の名を知っているとは思わなかった。

その傍らの紫の瞳も、何もかも知っているかのように、静かにルリを見据えている。

おそらく、彼は　　彼らは、ルリの生い立ちについても把握しているのだろう。

肅清された貴族の庶子であるルリが、今後不穩の種となるかどうかも、きつと見定められているに違いない。

ルリ自身、父の一族の恨みを晴らそうとも、国家の転覆を狙おうとも思わないが、それをし得る動機のある人間として、マークはされているかもしれない。

そう思うと、ルリの心はどんどん冷たく凍えるようだった。

しかし

「ルリさん、一緒に行ってくれるの？」

そう言っつて、ルリの手に触れたのは柔らかな温もり。

あどけない大公爵夫人の、小さく壊れそうな掌が、ルリと手を繋ぐようにそつと絡まってきた。

その時ルリははつとして、再び階上を振り仰ぐ。

自分と少女に降り注ぐ二対の瞳は、ただただ温かく、疑念などかけらも混ざっていないように思えた。

大切な大切な少女を、ルリは託された　託してもらえた。

それは、彼らがルリを少しも疑っていないという証拠であり、そのことをルリに教えるための最適の手段とも思えた。

父の犯した罪から離れられなかったのは、ルリ自身だった。自ら柵の蔓に絡まりにいつて、人の目を恐れて疑心暗鬼になってしまっていたのだ。

それがどれほど愚かで無益なことかと、この時ようやく気づかされたような気がした。

胸が、じんと温かくなった。

ルリは、大切な少女の手を優しく握り返し、そつと引いて歩き始めた。

「一緒に参りましょうか、スマイレ様」

「20」

瑠璃と栗（後）

「ルリ”って、素敵な名前ね」

「まあ、ありがとうございます」

ルリという名は、母がつけてくれた名だ。

短く、特別に深い意味もない語句だが、皇太后陛下が「鈴の音のようで可愛らしいわ」と言ってくれるので、とても気に入っている。そんなルリの名を、ふわりと絡めた柔らかな手の主にも褒められて、また嬉しくなった。

「ルリってね、私の故郷では青色をした鉱物の名前で、宝物になるんだよ」

「まあ、そうなのですか？」

まだ王宮の建物に入る手前、スミレはそう言つと、拾い上げた小枝で土の地面に何やら書き始めた。

『瑠璃』

それは、ルリが今まで見たことのないような幾何学的な紋様で、もちろんさつぱり理解できなかったが、スミレはそれでもかまわないようだった。

「金・銀・瑠璃に瑪瑙に……あとは忘れたけど、とにかく七つの宝物・七宝の一つで、とっても綺麗な青色をしているの　ルリさんの瞳みたい」

金銀は、グラディアトリアでも装飾品にと重宝され、それらはたいてい高級なもので、それと並ぶ宝物に自分の名前を例えられたルリは何だか照れくさかった。

しかし、愛する母譲りの、そして慕わしい皇太后陛下とも似ていると言われる瞳を褒められたのは、とても嬉しく誇らしかった。

愛らしいレイスウエイク大公爵夫人の手を引いて王宮を歩けば、当然ながら多くの視線が集まってきた。

けれどそのどれもが好意的で、彼女がどれほどこの国の人々に歓迎されているのかがよく分かる。

いつもはツンと澄ました貴族のご令嬢様まで、「いいわね、その手を譲ってほしいわ」と、手を繋いだルリを羨ましがるほどだった。スミレはそんな人々に対して、とにかくにこにここと笑顔を返していたが、けしてルリの手を離すことはなかった。

それは彼女が、大公爵夫人としての立場上愛想よく応対しながらも、実はそれほど社交の場が得意ではなくて、ルリの手に縋って早くその場を切り抜きたいと望んでいるようにも感じた。

そう思うと、ルリの中ではこの親しみ溢れる高貴な少女への庇護欲がむくむくと膨れ上がり、巧みに彼女を庇いながら目的地である宰相執務室を目指した。

そうして辿り着いたのは、見上げるほどの大きな扉。

ルリが仕える皇太后陛下の私室のそれと似ているが、宰相執務室の扉はさらに重厚な雰囲気があつて、ノックをする手が思わず躊躇した。

それでも、片手に握った柔らかな掌に奮い立たされ、ルリは控えめにそれを叩いた。

「おかえり」

ノックに応える声よりも早く、内側から扉を開いてそう柔らかな声で出迎えたのは、この部屋の主ではなく、その兄である先帝ヴィオラントだった。

思わぬ近い距離で彼に相對してしまったルリは、何度見ても見慣れぬ至高の美貌にびくりと竦み上がる。

繫いだ手からそれを感じたのか、スミレはルリを見上げて小さく苦笑を漏らすと、今度は逆に彼女の手を引っ張って部屋の中へと連れ込んだ。

「ヴィー、ただいま」

「ああ。スミレ、何を持って帰ってきたのだ？」

「栗だよ」

スミレが自分で持つと言って、片手にぶらぶら下げてきた袋をヴィオラントに見せつつ、その入れ物をルリが工面したことが告げられる。

すると、伶俐な目元を優しく緩めて妻の話を聞いていた先帝陛下の視線が、すっとルリを捉えた。

思わず全身を緊張に強張らせた侍女に、彼もまた苦笑するように瞳を細めると、大切な少女を抱き寄せつつ言った。

「妻が世話になったな。礼を言う」

「いつ、いえっ！」

「そなたも、義母上の使いの途中だったのではないか？ 手間を取らせてすまなかった」

「あ……いえ、急ぎの用ではありませんでしたし、帰りの時間も定められていけませんので大丈夫です。それに」

ルリは相変わらず緊張が解けることはなかったが、ずっとどこか遠く恐ろしいばかりだった先帝陛下が、自分が手を引いてきた小さ

な少女を大事そうに腕に抱き、愛おしくて堪らない様子で頬を寄せ
る様を見ていると、何だか心の奥が柔らかく解れていくように思え
た。

そして、そんな彼らを見てみると、自然とルリの唇から温かな想
いがもれ出した。

「スマレ様とご一緒できて嬉しゅうございました。思いがけずお会
いできて、楽しい時間を過ごさせていただきました」

媚でも諂いでもない。本心からにじみ出た言葉というのは、相手
の心に真っ直ぐ届くのだ。

ルリの言葉を聞いたスマレは、ふっくらとした頬を薔薇色に染め、
溢れんばかりの笑顔を返してくれた。

その頬に、愛おしげに口付けしたヴィオラントは、無表情と有名
な美貌をわずかに確かに綻ばせて、ルりに言った。

「そう言ってもらえると、ありがたい。そなたとスマレは年も近い。
また、相手をしてやってくれ」

「はっ、はいっ！ 喜んでっ！！」

そんなやりとりを、執務机に凭れて微笑ましく見守っていたのは、
この部屋の主である宰相クロヴィスだ。

対して彼をじっと見つめたスマレは、おもむろに袋から栗を両手
で掬って取り出すと、ヴィオラントの腕の中から伸び上がり、宰相
の執務机の上にそれをごろごろんと転がした。

「こらっ。おもちゃを仕事机の上に散らかさないで下さいよ」

「おもちゃとは何だね、クロヴィス君。これはれっきとした食料だ
よ」

「そうですね。義姉上様のような小動物には、いい餌になるかもし

れませんね」

「いいえ、クロちゃんみたいな大型の動物の餌にもなるのですよ」
「……………」

ルリは、かの宰相閣下が小さな少女に言い負かされたのを目の当たりにして、信じられない思いだった。

ふと見れば、そんな二人のやりとりを、先帝陛下が実に面白そうに眺めている。

ルリは実のところ、暇乞いをするタイミングを逃してしまっていたのだが、高貴な方々は誰も彼女に出て行けとは言わないので、黙って空気に徹することにした。

「あのね、今まで誰も食べなかったからって、食べられないものだと決めつけるのはつまらないよ。男の子なのに冒険心のない弟を持つて、おねえちゃまは非常に残念だ」

「木の実一つでえらい言われようですが…………それはやはり家畜の餌ですよ」

「かたいっ！ もうっ、クロちゃんってば、ホント頭かたいっ！ そんなだから、いつも難しい顔して書類と睨めっこしなきゃなんないのよ。柔軟な考えができれば、ぱあっと名案が閃くこともあると思っただよ」

「なるほど、一理あるな」

「兄上っ……………」

うむと頷いて先帝陛下が口を挟むと、冷厳と有名な宰相閣下が情けない声を上げた。

そんな、初めて目にする皇族方の微笑ましいやりとりに、ルリは恐れ多くも笑いを堪えるのに必死だった。

「硬い実だから食べられない」「誰も食べたことないんだから食

べられない”　でも、実は中身は意外に柔らかくつて、しかも手を加えたら甘くて美味しいだなんて、食べてみなくちゃ一生分からないことだよ」

「　っ……」

それは、一見木の実のことを指しているように見えて、実は国政の事案に頭を悩ますクロヴィスを導く言葉だった。

もちろん、スマレは彼が何に悩んでいるのかも、それが国政にとつてどれだけ重要な問題かも知りはしないが、頑に凝り固まった考えや価値観では、新たな答えは何も生まれて来ないと言いたいのだ。先帝陛下の言う通り、「確かに一理ある」と思ったのはルリだけではなかったようで、言われた本人であるクロヴィスもはっとそれに気づかされたのだろう。

彼は綺麗に整えてあつた金髪をくしゃりとかき乱すと、ふっとため息をついて苦笑をもらした。

「なるほど、何ごとをやってみなければ分からないとは、その通りですね。確かに、私は少々頭が固かったかもしれませんが」

「少々じゃなくて、めっちゃくっちゃんに固いんです。かっちゃんこっちゃんです」

「スマレ、今日のところはそれくらいにしてやりなさい」

自らの不肖を認めたクロヴィスに、容赦なく畳み掛けるスマレと、それを呆れたように嗜めるヴィオラント。

そんな彼らのやりとりに、笑いを堪えるルリもそろそろ苦しくなつてきた。

しかし幸い、いたいけな侍女の腹筋に限界が訪れる前に、皇族方の喜劇の舞台はお開きとなった。

「この事案については、過去の例はこの際参考程度にとどめ、もう

一度一から考え直してみます」

そう言つて、執務机の上に広げていた書類を束ねたクロヴィスに對し、その兄ヴィオラントも「それがいいだろう」と頷いた。

退位した彼は、相談程度であれば話を聞かないことはないが、国政の中枢に関わるようなことには意見も述べないようになっている。それは、玉座を譲つた末弟ルドヴィークの顔を立てるためであるとともに、彼らの手腕を信頼しているとの証なのだ。

憑き物がとれたような笑みを浮かべた弟に安心したのか、ヴィオラントは栗の入った袋を持ち直した妻スマレを促すと、宰相執務室をあとにした。

日が落ちない内に屋敷に戻るのが、レイスウエイク大公爵夫妻の常だ。

最近では、王城訪問のついでに街に立ち寄り、のんびりと散策を楽しんでから帰る場合もあるらしい。

そうしてヴィオラントは、扉の外まで見送つて礼を言う弟の肩を労るように叩き、小さな奥方の柔らかな手を、先ほどルリがしたように優しく握つて去つていった。

その背中を今までにないほどの親しみと微笑まじさを感じながら見送り、振り返つて「ルリさん、またね」と微笑むスマレに深々と頭を垂れながら、ルリはその時はたとあることに気づいた。

またしても、宰相閣下の執務室を去るタイミングを逃してしまつたのだ。

慌てて顔を上げたルリは、大公爵夫妻の後を追う形で部屋から出ようとしたが、それよりも一步早く、兄夫婦を見送り終わった宰相閣下が、パタリと扉を閉めてしまった。

「……」

再び、ルリの表情は激しく強張つた。

泣く子も黙る宰相閣下。

美しい笑顔で愚かな爺どもを扱下ろし、使えない人間は容赦なく切り捨てる鬼の宰相。

そして、数々の美女と浮き名を流しながらも、その誰にも心は与えない冷たい美貌。

そんな噂の宰相閣下と、思いがけず二人つきりになってしまったルリは、極度の緊張に襲われる。

引きつる喉から何とか声を絞り出して、暇の許しを得ようと口を開きかけたルリだったが、またしても相手に先を越されてしまった。

「お茶にしましょうか」

「……は、え……？」

若い侍女が可哀想なほどがちがちに緊張しているのが分かったのか、クロヴィスは苦笑するように口元を緩めてそう言った。

それに、まともな返事も返せないルリに呆れるでもなく、彼は接客用のソファの脇に置いたワゴンへと歩いていく。

宰相閣下自ら、お茶の用意をしようというのだ。

それに気づき、ようやくはっと我に返ったルリは、慌ててワゴンへと駆け寄った。

「お待ち下さいっ！ お茶のご用意でしたら、わたくしが……！」

そう言い募るルリに対し、柔らかく瞳を細めたクロヴィスは「いえ」と返し、ポットに伸びた彼女の手を捕まえると、スマートな所作でソファへと導き座らせた。

「義母上の侍女であるあなたに、スマイルのお守りという余計な仕事を頼んでしまったのは私です。その礼をさせて下さい」

「クロヴィス様っ、ですが……」

「これでも、私のいれるお茶は美味いと、あの手厳しい義姉上のお墨付きなんですよ?」

「ですが、わたくしは……あの……あの……」

「使いの帰りの時間は定められていないと、先ほど言っていましたよね。急ぎの用ではなかったと。それとも、私のお茶に付き合うのは嫌ですか?」

この宰相閣下に笑顔でそう言われて、断れる人間がいるというなら会ってみないと、ルリは思った。

「い……いただきます……」

「よろしい」

背中に冷たい汗を感じながら返事をしたルリに、クロヴィスは満足げに頷くと、彼女の側で茶葉の箱を開いた。

そうして、思わず見蕩れるほどの手際の良さでお茶の用意を整えた彼は、ポットとカップに視線を落としたまま話を続けた。

「そういえば、あなたは焼き菓子を作るのが得意なのだそうですね?」

「……え?」

「義母上はもちろん、スミレがしきりに褒めていました。先日は“この絶品は食べなきゃ損”と言って、わざわざ私の口にまで放り込みにきましたよ。くるみの入ったマフィンでしたか。あれは確かにとても美味かった」

「あっ、ありがとうございますっ!」

宰相閣下が、お世辞を言うような方ではないことも、広く知れ渡っている。

一介の侍女ごときに胡麻をすって得することも当然何もないので、

それは本心からの褒め言葉だとルリは理解した。

緊張がなくなることはなかったが、ぱっと目の前が明るくなったように感じた。

嬉しくて嬉しくて、ついつい大きな声で礼を返してしまった。

そんな自分に恥じ入って、耳まで真っ赤にして俯いてしまったルリにクスクス笑うと、クロヴィスはちよいどいい塩梅になったお茶をポットからカップへと注ぎ、彼女の前にそっと置いてやった。

「あ、い、いただきます」

「どうぞ」

こぼして火傷をしないかと、見ている方が案じるほど緊張に震える侍女の手が、カップに伸びた。

そうして、きちんと教育を受けたと分かる上品な仕草で、それを口元に持っていく。

とたん、彼女の深い青色の瞳がぱちくりと瞬き、上品に弧を描いた口が「とてもおいしいです」と告げた。

そんな媚のない素直な様子に、クロヴィスの中でのルリへの好感度は増していく。

クロヴィスも、自分のいれた紅茶に口を付けつつ、ふと執務机の上に置き去りにされていたものを思い出した。

先ほど、スマレが庭で拾って半分置いていった、大振りの木の実だ。

「……クリって、言ってましたね」

「はい。スマレ様は、蒸しても焼いても美味しい木の実で、ご実家ではよくお召し上がりになられたと」

「……ふむ」

スマレが両手で掬ったそれらは、大人の男の掌ではたったのひと

掴みだ。

クロヴィスはそれを掌の上で転がしてまじまじと眺めていたが、突然懐から真つ白いハンカチを取り出したかと思うと、先ほどルリがスミレに作ってやったように袋状にし、その中に栗を全て放り込んだ。

そして、それをルリの方にすいっと差し出して言った。

「ルリ、あなたにお願いがあります」

「あつ、はい。何でございましょう」

「この木の実で、菓子を作ってご馳走してください」

「……えっ!？」

ルリは、突然の申し出に戸惑った。

実は、料理人でもないルリが王宮で料理を作るといふのは、かなり神経を使うものなのだ。

しかも、皇族の方々に振る舞うとなると、調理場の本職の人達にバレては何かと失礼と、いろいろ気を使う。一介の侍女が出しゃばっては、彼らも気分がよくないだろう。

それでも、敬愛する皇太后陛下に請われた時は、後宮の調理場を借りて作っていたのだが、宰相付きの侍女ではない自分が彼のために菓子を作るなど、本当に許されることなのだろうか。

そう逡巡するルリの心を見透かしたクロヴィスは、穏やかな笑みを浮かべたまま続けた。

「もちろん、無理にとはいいませんよ。あなたも正規の仕事があるのですから、煩わせるつもりありません」

「……」

「けれど、できればお願いします」

「あの……」

「あなたに、作ってもらいたいのです」

クロヴィスはそう言って、カップを持ったルリに手を添えてそれをソーサーに戻させる。

びっくりと、可哀想なほどに震えた華奢な手に、カップのかわりに栗の入った包みをそつと握らせた。

受け取ってしまった以上、ルリにはもう断る術は残されていない。思わず半泣きになって声もでない侍女に対し、麗しい宰相閣下はにっこりと笑うと、とてもとても優しい声で告げた。

「その時は、また一緒にお茶を飲みましょうね」

「……」

「急ぎませんよ。でも、心待ちにしていますね　ルリ」

その後、何とか宰相執務室から脱出したルリは、その足で後宮の調理場に飛び込んだ。

彼女の尋常ならざる様子に心配した先輩侍女達に、混乱したままのルリが包み隠さず事情を話すと、彼女達もひどく驚いた。

これは、一大事！

なんとたつて、可愛い妹侍女が、冷厳と有名な宰相閣下の胃袋を掴んでしまったのだ。

侍女達が慌てて主たる皇太后陛下に相談に行くと、彼女は「あらあつ！」と嬉しそうに顔を輝かせた。

母は、いつまで経っても身を落ち着けない次男坊に、ついに春の兆しがやってきたのだと確信したのだ。

しかもその相手となる女性は、彼女が我が子のように慈しんで成長を見守ってきた秘蔵っ子。

この縁を逃してなるものかと、皇太后のやる気は俄然燃え上がった。

その炎は、彼女に仕えるルリの姉侍女達にも燃え移り、その日は

遅くまで、後宮の調理場は皇太后付きの侍女達によって占拠された。

そうして出来上がったのは、栗の入ったパウンドケーキ。

栗は一度茹でてから、姉侍女達に手伝われて四苦八苦して皮を剥き、内側についた渋い皮ごとシロップで甘く柔らかく煮た。それを、くるみを使う時のように食感が残るほどの大きさに砕き、あとは栗を煮詰めたシロップを加えていつものパウンドケーキを焼く要領。

ただし、大人の男性に振る舞うのだからと、甘さを抑える代わりにブランドーを少々加え、香りよい出来映えになった。

もちろん、誰よりも先に味見をしたのは、ルリの主人である皇太后陛下だ。

それを口にした皇太后は、「あなたは天才よっ！」と言ってルリを抱きしめ、直々に侍女頭に綺麗に切り分けてラッピングするように命じると、翌日の午後のお茶の時間、ルリを宰相執務室へと追い立てた。

先触れは出しているので、遠慮なく扉をノックしなさいと言って送り出してくれた皇太后の言葉に、勇気を振り絞って扉を叩いたルリの訪問に、それはすぐに内側から開いた。

「いらつしゃい。来て下さって嬉しいですよ、ルリ」

「お邪魔いたします、クロヴィス様」

ルリの緊張はまだ解れることはないが、出迎えたクロヴィスの穏やかな顔に、今日は何とか笑顔を返すことができた。

そうして、皇太后付きの一番若い侍女が、お菓子を持って宰相執務室に出入りすることが当たり前のこととなっていく。

彼女が、愛らしいレイスウエイク大公爵夫人を「お義姉さま」と呼ばされる日も、そう遠くない　かもしれない。

瑠璃とティータイム（前）

「ルリ、お茶の時間だけど……宰相執務室に行かなくていいの？」
「いいんです」

大國グラデアトリアの国母エリザベス皇太后陛下が住まう後宮では、ここ十日ほど、一番年若い侍女ルリと姉侍女達の間でこのような問答が繰り返されている。

レイスウエイク大公爵夫人が拾った庭の木の実をきっかけに、ルリがこの国の宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵にお菓子を振る舞うようになったのは、今から半月ほど前のこと。

以来ルリは、ほぼ三日に一度の割合で、午後のお茶の時間に宰相執務室を訪れていた。

宰相クロヴィスは、ルリの深く敬愛する主人である皇太后陛下の義理の息子でもある。

冷厳な雰囲気からは想像もつかないが、彼は意外に甘いお菓子を好むようで、ルリが差し入れたケーキやクッキーをそれはそれは美味しそうに召し上がる。

そして、そのお礼と言っては、いつも彼女に手ずから紅茶を入れてくれるのだ。

先帝に肅清されて没落した侯爵家の庶子で、皇太后陛下に仕える数ある侍女の中でも一番下っ端なルリにとって、麗しき宰相閣下は雲の上のような方。

そんな彼と、たとえば半刻ほどの時間といえど、二人っきりで過ごすのは非常に緊張を強いられる。

ルリ自身口数が多い方ではないし、気の利いた話題を振れるほどの人生経験もまだない。

クロヴィスからお茶を受け取ると、決まって伏し目がちに黙り込んでしまうルリに対し、しかし彼は呆れることも失望することもなかった。

「ルリは、休日は何をして過ごしているのですか？」

「はい、あの……、と、図書館に行きます」

「図書館？ 城のですか？」

「はい。王城の図書館には、面白い本がたくさんあって、いくら読んでも読み切れません」

「おや。あなたは相当、本がお好きのようですね」

緊張に震える声で必死に答えるルリに対し、優雅に紅茶のカップに口をつけながら耳を傾けるクロヴィスの声は、どこまでも穏やかだ。

冷たく厳しく、大の男をも泣かせると有名な宰相閣下の噂とは、だいぶと違った印象を受ける。

（厳しいのは仕事に対してだけで、普段はとても優しく穏やかな方なんだわ）

そう心の中でこっそり認識を改めたルリに、「そうとも限らないよ……」と教えてくれる人は、今はまだいない。

少しずつクロヴィスへの畏怖と警戒を緩め始めたルリは、最近ではようやく彼の顔を見て会話ができるまでになっていた。ただし、時々視線が泳ぐのだけは致し方ない。

「クロヴィス様は、お休みの日は何をなさっているのですか？」

「ん？ 私ですか？」

社交に拙い自分に根気強く付き合ってくれる彼と、何とかスマー
トに会話をしたいと思いつつそう返したルリだったが、そこではた
とあることに気づいた。

いつも忙しくしている宰相閣下。

現在グラディアトリアは周辺諸国との関係も良好で、内政も非常
に落ち着いた状態であるが、若き皇帝陛下を支えるクロヴィスにか
かる政治的重圧というのは、ルリのような一介の侍女には想像もつ
かないほどのものだろう。

毎日朝早くから夜遅くまで執務室にこもっている彼に、休日など
あるのだろうか。

そう思うと、ルリは何だか胸がギュツと苦しくなった。

「わたくしのような者が申し上げるのは、とてもおこがましいこと
ですが……。お休みはきちんと取って下さいませね、クロヴィス様」
「ああ、心配して下さいているのですか？」

「休日も返上して、執務室にこもっていらっしやると聞きました。
クロヴィス様のお忙しさは、わたくしのような一介の侍女には計り
知れませんが……」

「おや、私のことを噂して下さいたのですか？」

クロヴィスはそう言って首を傾げると、細いフレームの眼鏡の下
でふっと目を細めた。

一方、ついつい話などというはしたないこと暴露してしま
ったルリは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「しっ、失礼しましたっ……!!」

「いいえ、かまわないのですよ。むしろ、ルリが私のことを話題に
して下さったなんて、嬉しいですね」

「も、も、申し訳ありませんっ……!!」

「いいんですつてば」

自分はなんてなんてはしたないんだらうっ！！　そう思って、真っ赤な顔で俯いて涙ぐむルリに、クロヴィスは苦笑をもらしつつ、ふむと顎に手を添えた。

「別に、休日返上して仕事をしているわけではないのですよ。ただ、私は元来仕事が好きなのと、あまりうまく休日を過ごす方法が思いつかないというか……」

普段は、いちいち遅い時間に帰るのが面倒だからと、王宮内に構えた私室で寝泊まりしているクロヴィスだが、休日には時々邸宅に帰る。

しかし、これといって趣味のない彼は、邸宅に戻ってもすることがない。

同腹の兄であるヴィオラントが、皇帝を退位した後は祖母方の実家であるレイスウェイク家を名乗ると言い出したので、母の実家であるリユネブルク公爵家はクロヴィスが継いだ。

幸い、先代公爵である祖父はまだまだ健在であるので、邸宅の方はほとんど彼に任せてしまっている。

祖父は穏やかで優しい人だが、競争心がなく政治事に関してもかたつきしなので、あまりクロヴィスとの間で話が弾むこともない。

とは言っても、彼は祖父のことは家族として愛しているし、邸宅に仕える使用人達のことも大切に思っている。

当主であるクロヴィスが戻れば、邸宅の人々はそれはそれは彼を歓迎し、穏やかで満ち足りた時間を用意してくれる。しかし、それに浸かってほっこりしてしまうと、気持ちが悪く仕事に戻った時の切り替えが難しいのではないかと、無意識の内に安らぎに対して構えてしまう。

そんな自分を、クロヴィスも自覚していた。

だからこそ、今日の前で萎縮してしまった慎ましい侍女が時々やってきて、一緒にお茶を楽しむそんなわずかな時間が、とても貴重で愛すべき瞬間に思えるのだ。

祖父と同じく、競争心や虚栄心の欠片もなく、穏やかで優しい侍女。

皇太后陛下に特別に目を掛けていただいているというのに少しも驕るところがなく、慎ましく大人しい少女。

割り切った女性としか関係を持たなかったクロヴィスにとっては、まだ子供っぽくて洗練されていないルリのような相手は対象外だったはずなのだ。

それなのに

彼女がやってくるお茶の時間が待ち遠しく、そのことで義母である皇太后陛下にからかわれるのも苦にならない。

余裕のある風を装いながらも、大人しい彼女との会話を何とか成立させるために、必死に話題を探す自分も嫌いではなくなった。

クロヴィスは初めて、家族と仕事以外で大切な存在を見つけたのかもしれない。

「私は、休日をごすのが下手なんです。だから、仕事をしていると時間が潰せてほっとするんだと思います」

「……ですが、お仕事ばかりでは息が詰まってしまうませんか？ のんびり、何もしないでゆっくり過ごされる時間も、たまには必要ではありませんか？」

ルリは顔を真っ赤にして俯いたまま。

それでも小さく返す言葉には、クロヴィスを労る気持ちが溢れていた。

それは、彼の心をふわりと優しく包んで温め、心からの笑みを浮かばせた。

「そうですね。でも、一人で上手く過ごせる自信がないのです。誰かに隣に居てもらわないと、すぐに仕事のことばかり考えてしまいそうです」

「まあ……」

「ですから、ルリ。次の休みは」

クロヴィスは紅茶のカップをソーサーに戻すと、流れるような仕草でそつとルリの手を取った。

まだ頬を赤らめた少女の、深い青い瞳が不思議そうに彼を見つめ返してきた。

兄ヴィオラントの愛妻スマレが、“綺麗な瑠璃色”と讃えた宝玉だ。

吸い込まれそうに美しいそれに目を奪われながら、クロヴィスは想いの続きを口にしかけた。

しかし

「クロヴィス、この件についてだが……」

ガチャリ??と、ノックもなしに宰相執務室の扉を開いた無礼者は、クロヴィスの弟ルドヴィーク。

長兄の跡を継いで玉座に就いた、グラディアトリアの若き皇帝陛下だ。

書類に視線を落としながら入ってきた彼は、ふと顔を上げて目の前の光景に固まった。

「……いらっしやいませ。??とここで、扉を開く前にノックをす

るのは、最低限の礼儀ではないでしょうか？ 陛下」

ルドヴィークの視線の先では、応接用のソファにテーブルを挟んで向かい合わせに座った男女が、手と手を取り合って見つめ合っていたのだ。

男の方は、この宰相執務室の主である兄クロヴィス。

女の方は、ここ最近何度かこの部屋で見かけることのある、生母エリザベス皇太后陛下付きの侍女である。

どう見ても、いい雰囲気になっていたところに乱入してしまったと気づいたルドヴィークは、すぐさま回れ右をして逃げ出したい気分だった。

しかし、彼がそれを行動に移すよりも早く、慌てて立ち上がった侍女が叫んだ。

「申し訳ありません！ ついつい長居をしてみましたっ！！」

「ルリ、待ちなさい」

「陛下、クロヴィス様、失礼いたします！」

顔を真っ赤にしたままぴよこんと頭を下げると、引き止めるクロヴィスの声も聞こえないのか、脱兎のごとく宰相執務室から逃げ出したのはルリだった。

「……………」

「……………」

バタンツ！ と扉が勢いよく閉められ、密室になった宰相執務室に、とてつもなく重苦しい空気が流れた。

「……………」

「……………」

この上なく申し訳なさそうな顔で謝る弟皇帝に、怒る気力もなくなったクロヴィスは、はあ……と深々とため息をついた。

そんなことがあった日から十日。

ルリは宰相執務室に赴いていない。

「どうしたの？ 何かあったの、ルリ？」

姉侍女達が心配するのも無理はない。

この十日の間、ルリには再三かの宰相閣下から招待の声がかかったというのに、彼女は体調不良を理由にそれら全てを断っていたのだ。

本来なら、一介の侍女が王族でもあるクロヴィスからの招待を断ることなど無礼にあたるのだが、ルリは彼の育ての母でもある皇太后陛下の侍女であるし、彼自身権力を振りかざして無理強いするつもりもないらしい。

忙しくて仕事から手が離せない彼は、今日もまた部下の文官にルリへの招待を託してきたが、彼女はつい先ほど丁寧になんか断ったところだった。

そんな様子をおろおろして見守っていた姉侍女達は、もしかや一つの懸念に思い至った。

「ルリ、あなた……もしかして、宰相閣下付きの侍女に、何か言われたんじゃないの？」

「……」

クロヴィス自身は他人に細々と世話を焼かれるのを嫌うので、個人的な侍女というのはつけていないが、宰相執務室として抱えている侍女はいる。

彼女達はたいてい、仕事の話でやってきた他の大臣や客人をもてなす用意や、部屋の中の整理整頓を請け負っているのだが、やはり大国の宰相に仕える侍女ともなれば、才色兼備のエリート揃い。

当然家柄もよくプライドも半端ないだろうと思われる彼女達にとって、突然目の前をちよろちよろし出したよそ者侍女など、うつつうしいに違いない。

そう思ってしまった姉侍女の言葉に、ルリはびくりと身体を強張らせた。

「えっ、そうなのっ!？」

そんなルリに、突然後ろから掛かったのは、澄んだ高い声。

慌てて振り向くと、先日ルリと宰相閣下の縁を取り持ったレイスウエイク大公爵夫人が、大きなアメジストのような瞳をうるうるさせてこちらを見上げたいた。

「ルリさん、いじわるされたの？」

「いえ、あの……」

「トウシューズに画鋏入れられた？ ドレスをハサミでチヨキチヨキされた？ 箱入りのネズミやゴキブリ送りつけられたっ？」

「ス、スマイレ様？」

「ひどいひどいっ！ ちょっと行って、とっちめてくるっ！」

ルリがあわあわするほどぶんすかと憤ったスマイレが、その勢いそのまま部屋を飛び出して行くこととするのを、やはりというか、当然止めた人物がいた。

「待ちなさい、スミレ」

「……大公閣下」

「すまないな。ここに来る前に、“ヒルドラ”なるものを観てきたので影響されたいらしい」

「はあ……」

スミレを軽々と抱き上げて止めたのは、彼女の夫であり先の皇帝ヴィオラント・オル・レイスウエイク大公爵。宰相クロヴィスの同腹の兄である。

彼の言う通り、実家である二ホンと通じている邸宅の自室で、兄嫁と一緒にお昼のワイドショーからドロドロの嫉妬渦巻く昼のドラマを鑑賞してきたらしいスミレは、ベタな嫌がらせを勝手に想像して怒りに震えた。

「だって、だって、ヴィー。こんな大人しそうな女子いじめるなんて、許せない。背中にカエルを入れてやるっ！」

「少し、待ちなさい。ルリ、本当に、宰相付きの侍女がそなたに嫌がらせをしたのか？」

「い、いいえ……」

「では、何があつてあの部屋から足が遠のいたのか、理由を教えてくださいえないだろうか」

ぶんぶんする妻も可愛くてならないらしいヴィオラントは、腕に捕まえた彼女を宥めるようにキスを落としながら、そうルリに向かって穏やかな声で言った。

先に宰相執務室に寄つてきたらしい大公爵夫妻は、弟クロヴィスの様子に何やら思うところがあつたのだろう。

恐れ多くも先帝陛下からの問いかけに、ルリは言葉に詰まった。

さらには、彼の腕に抱え込まれた愛らしい大公爵夫人と、その場にいた姉侍女全員の視線が、ぐつとルリに迫る。

握りしめた掌に汗を滲ませ、困ったようにルリが視線を下げた瞬間　また新たな場所から声がかかった。

「それは、私も知りたいですね」

カツリ??と音を響かせて、後宮の調理場に足を踏み入れたのは、今まさに話題となっていた宰相執務室の主。

「……クロヴィス様……」

いつになく硬い顔をした宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵は、カツカツと鋭い靴音を響かせてルリに近づくと、俯く彼女の正面に立った。

瑠璃とティータイム（後）

「ルリ」

「……」

床を見つめるルリの視線に、クロヴィスのよく磨かれた黒い靴の先端がうつる。

頭の上から降ってきた彼女を呼ぶ声は、いつもよりもどこか冷たく強張って聞こえた。

顔を上げるのが恐ろしく、ルリはぎゅっと唇を噛んだまま身体を縮こませる。

そんな彼女を庇うように、横から口を挟んだのはスマレだった。

「クロちゃんが女関係ちゃんとしなから、ルリさんがいじめられたんじゃないの？ 胸に手を当てて、よく思い出してみなっ」

「はあ、まあ、確かに。褒められるような付き合い方をしてきたかと聞かれれば、何とも答え辛いですけど……少なくとも、後々悔恨が残るような別れ方はしていませんよ。執務室付きの侍女とは、絶対にそういう関係にならないようにしていますし、公私混同するような馬鹿を雇った気もないんですがね」

「クロちゃんにその気がなくても、侍女さんはクロちゃんにお熱だったかもしれないじゃない？ 女は怖いんだよ！」

くどいようだが、スマレは現在昼ドラの多大な影響を受けている。そんな彼女の言葉を聞いて、縮こまったルリの前に仁王立ちしたまま、クロヴィスは「ふむ」と顎に手をやった。

「嫉妬をして、年下の侍女に嫌がらせをするようなつまらない者なら、うちの執務室にはいませんね。本当にそんなことがあったのなら、その者を割り出して排除せねばなりません」

「……」

「でもね、あなたは理不尽な悪意を向けられたくらいで、へこたれたり引きこもったりするような意気地なしじゃない。　　そうでしょう、ルリ」

「……クロヴィス様」

そう言ったクロヴィスの声は穏やかで、ルリは思わず顔を上げて彼を見た。

ルリを真っ直ぐに見下ろす碧眼に責める色はなく、少しほっとする。

「あなたはその生い立ちゆえに、昔から心ない言葉やつかみにさらされてきたでしょう。それでも、いじけることも潰されることもなく、まっすぐに前を向いて歩いてきたではありませんか」

クロヴィスの言葉に、ルリはドキリとした。

先帝によって罪人として処刑された侯爵の庶子であるルリは、母とともに皇太后陛下に救われ後宮に住まう事を許されたが、やはり当時はそれを鼻屑であるとやっかむ輩も、父侯爵の罪を持ち出し糾弾したがる者たちもいた。

“ 罪人の子 ”

“ 没落貴族の妾 ”

様々な陰口が、皇太后陛下の目を盗んで母子に降り掛かった。

母はぎゅっと唇を噛んでそれに耐え、必死でルリの耳を塞ごうと

したが、物心ついた娘には自分の置かれた立場がよく分かっていて、辛くなかったといえ、嘘になる。けれど

「だって、ルリさんが何か悪いことしたんじゃないもん。堂々としてなくちゃだよ。子供の罪は親にも責任があるかもだけど、親の罪は子供に何にも責任を押し付けちゃ駄目なんだよっ！」

「スマレ様っ……」

「もちろん子供も、親に罪を被らせないように、しっかりしなきゃいけないけどね」

お父上の罪は、あなたの罪ではないのよ。堂々としてらっしやい

かつて、噂を耳にしたらしい皇太后陛下がルリに言ってくれた言葉を、今度は鈴が鳴るような可愛らしい声が再び紡いだ。

ルリの生い立ちについて、スマレは夫であるヴィオラントから聞いたのだろっ。

いつの間にかその夫の腕から抜け出していたスマレは、横からぎゅっとルリにしがみつくように抱きついて来た。

思わぬ温かな感触に、ルリはついつい頬を綻ばせ、対するクロヴイスは器用に片眉を上げた。

「そう、その通りです。己の生い立ちを恥じることと悔やむことも必要ない。ちゃんとそれを理解していたルリは、けして奴らの悪意に屈しなかった。だからこそ、今回ももしも私に関わる何者かが彼女をやっかんだとしても、それだけで私を見限るようなことはないと思っていました」

「みっ、見限るだなんてっ……！！」

「では、何故です。お茶の時間に呼んでも来て下さらない。仕事が

終わった時間に訪ねれば居留守を使う。何か、あなたの気に触るよ
うなことがありますか？」

「いえ……あの……そんな……」

次々と畳み掛けるクロヴィスの気迫に押されまくって、ルリはた
じたじとして言葉も出ない。

そんな二人を見比べて、ルリに貼り付いていたスマレが再び口を
挟んだ。

「ちょっと落ち着きなよ、クロちゃん。鼻息荒いよ、興奮し過ぎだ
よ。あと、そんな高い位置から見下ろされて詰め寄られたら、ルリ
さんの繊細な心臓によくはないから、しゃがみなよ」

「……これで、いいですか」

「うわっ、ホントにしゃがんだ。素直なクロちゃんとか、気持ちわ
るう……」

「うるさいですよ、義姉上様。私もいろいろと必死なのですから、
温かく見守ってくださいよ」

スマレに言われた通り長身を折ってしゃがみ込み、その場に片膝
をついたクロヴィスの懇願に、彼の兄が応えた。

ヴィオラントは背後から手を伸ばし、ルリに貼り付いていた妻を
抱き上げる。

スマレもクロヴィスとルリの仲を邪魔するつもりはないので、「
よし、ガンバレ」と一言エールを送ると、夫の腕に身を任せた。

クロヴィスは戸惑うルリの両手を取ると、びくりと震えたそれを
握りしめた。

「何故、私のところに来て下さらなくなったのですか？ それを聞
かない限り、今日はこの手を離しません」

「あの……」

「正直に言ってお下さって結構です。私と、お茶をするのが嫌になったというのならば……」

「ちっ、違いますっ！ 嫌なんかじゃないですっ！！」

伏し目がちにそう言ったクロヴィスを見下ろす形になったルリは、自分の手を握りしめた彼の手が震えているような気がして、思わず大きな声で叫んでいた。

すると、わずかに赤味を帯びたルリのそれよりもすっと伶俐な青い瞳が、「では何故？」というふうに見上げてきた。

ルリはぐつと言葉に詰まりながらも、やはりどうしても理由を話さないわけにはいかなかった。

「あの……まず、クロヴィス様とのご縁で、誰かに嫌がらせを受けたというようなことはありません」

「それは、本当ですか」

「はい、本当です。あと……クロヴィス様と一緒するのが嫌になったなんてことも、絶対にありません。とても、楽しい時間を過ごさせていただいております」

「そうですか」

「はい……」

クロヴィスとの時間を楽しいとルリが言ったとたん、彼が本当に嬉しそうに瞳を細めて笑ったので、ルリは胸がドキリとした。

二人の後ろで、何だかルリにつられたように頬を赤らめたスマレも、自分を抱くヴィオラントにしがみついてドキドキしている。

嫌がらせを受けたわけでも、クロヴィスと会うのが嫌になったわけでもない。

それでは何故、宰相執務室への出入りを一方的にやめてしまったのか。

そう、もう一度問われたルリは、言い辛そうな様子で口を開いた。

「先日……最後にお邪魔した日ですが、私……慌ててお暇しましたでしょう？」

「ええ、ルドヴィークに邪魔されたのでしたよね」

宰相と侍女がせっかくいい雰囲気になっていたというのに、ノックを忘れた皇帝陛下が打ち壊した。

「扉から飛び出したら、そこに宰相室付きの侍女の方がいらっしやうて……」

「確かに、あなたと入れ替わりに侍女が入ってきて、陛下にお茶をいれてくれましたが……彼女が何か？」

「あの……泣いて、いらっしやうたんです……」

「え……？」

扉を飛び出したルリは、その前にいた侍女に気づかず打ち当たってしまった。

慌てて頭を下げるルリに対し、彼女は「いいのよ、でも気をつけてね」と優しい声で言ってくれた。

けれど、ルリが顔を上げた瞬間、彼女の長い睫毛の上に見つけてしまったのは、涙の痕跡。

ルリがそれを確かめる前に、彼女は顔を背けて扉の向こうに消えて行ってしまった。

「わたし……ずっと思ってたんです。クロヴィス様の侍女でもない自分が、午後のお茶の時間に出しゃばってきて、本来お仕事をなさる侍女の方々に嫌な思いをさせてしまっているのではないかと……」

「そんなこと……」

「……クロヴィス様とご一緒できるのが楽しくて、ずっと気づかないふりをしていたんです」

「……ルリ」

「でも、あの方の涙を見てしまつて、自分の立場を思い出しました。わたしは、皇太后陛下エリザベス様の侍女です。就業時間中に他の方の元にお邪魔してお茶をいただくなど、陛下のお許しがあるとはいえ職務怠慢でした。これからは、身分を弁えて行動します」

「ルリ……」

硬い表情でそう宣言したルリに、クロヴィスは困つたような声を上げた。

そんな男に気づかないまま、彼女は「あ、ですが」と続ける。

「お菓子は、失礼でなければまた作らせて下さい。クロヴィス様に食べていただけると、嬉しいんです」

「……」

そう言つて、にこりと笑つたルリを、その前に跪いていた男は感極まつたように抱きしめた。

「クッ、クロヴィス様っ……!？」

「クロちゃん、早まつちゃダメよっ。何ごとも、順序よ順序っ!」

抱きしめられたルリは顔を真っ赤にしてわたたと慌て、一方背後でそれを目の当たりにしたスミレは、自分はヴィオラントと順序も何もかもすつ飛ばし、会つた翌日にベッドインしたことを棚に上げて叫んだ。

「……分かりました。あなたに気を使わせないよう、お茶の時間の度に頻繁に呼びつけるのは控えます。ですが、私のためにお菓子は作ってくれるんですね？」

「は、はい」

「では、もう一つ。あなたにお願いがあります」
「……何でございましょう?」

いつか交わしたのと同じような会話だと思いつつ、クロヴィスに抱きしめられてドギマギしたまま答えたルリに、彼はにっこりと優しい笑みを浮かべて言った。

「ルリの、次の休みを私にください」

「……えっ?」

「あなたと同じ日に、私も一日休みを取ります。一緒に過ごしましょう」

「ええっ……!?!」

「この前言ったでしょう? 私は休日をごすのが下手なのです。時間を持て余すと、すぐに仕事のことを考えてしまう。きっちり休めるように、あなたが側で見張って下さい」

「……」

「嫌とは言いませんよね ルリ?」

跪いてルリを抱きしめていたはずのクロヴィスはいつの間にか立ち上がり、両腕ですっぽりと彼女を包み込んだまま、そっとその耳元に囁いた。

こんな状態で、否と言える人間がいるなら会ってみたいと、恥ずかしさと緊張で半泣きのルリは心の中で叫ぶ。

「ヴィーさん。弟君の口説き文句について、一言どうぞ」

「強引すぎるのは如何かと思うが、よく頑張ったのではないかと」

一歩後ろで仲良く寄り添って、彼らを見守っていたレイスウエイク大公爵夫妻はそう言葉を交わし、ルリの姉侍女達は麗しい宰相閣下と少女の恋物語に、乙女のように胸をときめかせていた。

「まあまあ、あなた達。こんなところに集まって、いったい何の騒ぎですか?」

そうして、柔らかい声とともに現れたのは、この後宮の主である皇太后陛下エリザベス・フィア・グラディアトリア。

今さらだが、一同が集まっていたのは、その後宮の一角にある調理場だったのだ。

そんな場所で、自分に仕える一番年若い侍女を抱き締めている次男坊を見つけた皇太后は、「まっ」と頬を両手で覆った。

「まあ、クロヴィス。こんな陽の高い内から、なあに? その子はわたくしの可愛い侍女ですよ。その子に関する事は、親代わりのわたくしを介してからにしてちょうだいな」

「これは、申し訳ありません、義母上。実は今、次の彼女の休みに二人で過ごすことを約束したところなのです。お許しただけですか?」

「クっ、クロヴィス様っ……!」

にこりと爽やかな笑みを浮かべ、義母たる皇太后陛下にそう請うたクロヴィスに、本当は二人の仲を全力で応援しているエリザベスは心の中でニヤリと笑った。

「まあ、よろしくつてよ。ですが、ルリを泣かせるようなことはいよう、しっかりエスコートなさいませ」

「もちろんですとも」

そうして、ルリの次の休日は、完璧に宰相閣下によって押さえられたのであった。

??後日、件の宰相執務室付きの侍女の涙について、詳細が判明した。

彼女はルリが心配したように、よそ者侍女の台頭を憂っていたわけではなかった。

「え……ご主人の浮気、ですか？」

「そうです。既婚者の彼女の名が出て不思議に思ったのですが、本人に確かめて真相が分かりました」

「き、聞いたのですか？ 直接？」

「ルリがあなたの涙を見たらしく、とても心配していましたと告げれば、ひどく恐縮して訳を話してくれましたよ」

ルリが涙を見た女性は、宰相執務室付きの侍女の中でも一番の古株だった。

国政の中枢たる宰相の侍女ともなれば、その役目はただのお茶汲みには留まらず、秘書的な仕事も請け負っている。

件の侍女は生家の家格が低く、元々は他の者の侍女として仕えていたが、その手腕を買われて宰相室に引き抜かれた経歴の持ち主である。

クロヴィスに仕え始めた頃には既に結婚していたが、妻の突然の大出世を妬んだ夫とは段々そりが合わなくなり、つい先日はその夫の浮気が判明して、侍女は心を痛めていたのだという。

情緒不安定になっていて、ついつい誰もいないと思って涙を堪え切れなくなった時、たまたま扉を開けて飛び出してきたルリに目撃されてしまったのだ。

「今さら旦那に未練はないといっているので、とれる分だけがつぱり慰謝料をとれるように、上手く手配してやりましたよ」

「……そ、そうですか」

「彼女もようやくすっきりしたようで、今後ますます仕事に励んでくれるそうです。頼もしいですね」

「……」

ルリはかの侍女の元夫に、少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「ところで、ルリ」

「はい」

「休みはどうしましょうかね？」

「あの……えっと……」

先日の宣言通り、三日に一度だったお茶の時間の呼び出しが、五日に一度になった宰相執務室に、ルリはこの日リンゴのパイを持参でお邪魔していた。

甘酸っぱいリンゴと、ほんのりスパイシーなシナモンが絶妙の逸品は、今日も泣く子も黙る宰相閣下を綻ばせる。

ルリに合わせてクロヴィスが捻り取った休日、もう二日後に迫っていた。

優秀な副官をはじめ、文官の部下一同はもちろんのこと、先日二人の仲を邪魔してしまったことを悔やんでいた皇帝陛下ルドヴィークも、彼らの休日に異議を唱えるはずもない。

また、はいつと元気な声を上げて挙手をし、「デバガメしたいと思いますっ！」と、堂々と宣言したスミレは、その夫であるヴィオラントが何とか説得して抑えてくれるだろう。

ルリの主人であり、身寄りのない彼女の親代わりを自負する皇太后陛下エリザベスは、王族であり公爵でもあるクロヴィスと並んで歩いてルリが肩身の狭い思いをしないようにと、既に何着も外出着

を用意してやったそうだ。

姉侍女達も、随分と前から我が事のようにそわそわしてる。

そんな周囲の異様な盛り上がりには、正直まだついていけないルリの困惑を深めるように、上機嫌の宰相閣下は笑顔でさらにとんでもないことを言い出した。

「そうだ。我が家に来ますか」

「……えっ……」

「義母上に、二日お休みをいただけるように頼んで差し上げますから、泊まっていかれては？」

「ええっ……？」

クロヴィスが言う我が家とは、グラディアトリアの四公爵家の一つ、リユネブルク公爵家のことである。

当然、没落した侯爵家の庶子であるルリにとっては、気軽にお邪魔しますと言えるような場所ではない。

しかし、あわあわと焦ってカップを取り落としそうになったルリの手を、さっと支えるように掌で包み込んだクロヴィスは、有無を言わさぬ笑顔で告げた。

「そうしましょう」

「……」

ルリが彼に「否」と答えられる日が、果たしてやってくるのであるだろうか。

それは、ルリ本人にも分からなかった。

瑠璃と算段

「クロちゃんはね、まずは乙女心とは何たるかから、勉強しないといけないと思うのよ」

「……はい、まあ。勉強は嫌いじゃないですが？」

今日も今日とて、グラディアトリアの宰相クロヴィス・オル・リユネブルクの執務机の上には、処理を待つ書類の山がいくつも出来上がっていた。

いや、失礼　処理の済んだ、書類の山だ。

非常に優秀な宰相閣下は、着々とその日のノルマをこなしていた。そんな処理済みの書類が積まれた机の上を、どんっ！と、ちっちゃな可愛い拳で叩いてクロヴィスを真正面から睨みつけるのは、彼の兄嫁スミレである。

泣く子も黙ると恐れられる冷徹な宰相閣下と、皇太后陛下付きの一番年若い侍女との仲を取り持った、まさに恋のキューピットともいえる少女は、この日も宰相執務室の扉を蹴破る勢いで入ってきたかと思うと、第一声が冒頭のセリフだった。

「クロちゃんってば、ルリさんをいきなり自宅デートに誘ったんだって？」

「……おや、それはルリ以外はほんの一部の者しか知らないはずですが、いったい誰がその話をレイスウェイク邸のあなたの耳に届けたのでしょうか？」

「壁に耳あり障子に目あり」という、ニホンのありがたいことわ

ざを、君に教えてあげよう」

「なるほど。内緒話というのはもれやすいものだ、注意を呼びかける言葉ですね」

「だいたいあつてる」

実際に今回スミレの情報源となったのは、クロヴィスの祖父だった。

クロヴィスとヴィオラントの生母マジエンタの父親で、前リユネブルク公爵アルヴィース・ティル・リユネブルク。

彼の跡を継いだ孫のクロヴィスが、なんと突然次の休みに屋敷に女性を招待すると言い出した。

滅多に屋敷に帰らないクロヴィスは、実質屋敷を任せきっている祖父にはルリのことを打ち明け、きちんと筋を通しておくつもりだったのだろう。

それだけでも、如何に彼がルリに対して誠実であろうと努めているかがよく分かる。

当主が今までもそれなりに異性との交遊を楽しんでいたことは把握しているが、女性を屋敷に招待したいと言い出したのは初めてだったので、リユネブルク公爵家それはそれは騒然となった。

若い女性の客を迎えたことのないアルヴィスは、いったいどう持て成せばいいのかと頭を悩ませ、結局客人の女性と年の近いスミレに助けを求めてきたのだ。

「アルおじーちゃまっつてば、ほんと可愛いの。何を聞くのかと思ったら、“女の子はいつたい何を食べるのかね？”って」

「ああ……おじいさま……」

その時の光景が目には浮かぶようで、クロヴィスは思わず片手で顔を覆った。

スミレが「おじーちゃまとおんなじものを食べるよ」と答えると、

アルヴィースは冗談抜きで驚きをあらわにし、真顔で「それなのに、どうしてスミレはそんなに小さいんだい？」と聞いてきた。

さらにその後一緒に食事をして、スミレが骨付き肉に豪快に齧り付いた姿を見た時には、“そんなものを食べて大丈夫なのか”、“お腹を壊すのではないのか”、“ちゃんと消化できるのかと”、いちいち心配したものだ。

「本気で、女の子は野菜とフルーツとケーキでできてると思ってたのね。夢見過ぎだよ。今はご隠居のおじーちゃんだから天然でも可愛いけど、あの調子で公爵とかいろいろと無理があつたのよく分かる」

政治になどまったく興味のないスミレでもそう思ったように、大國グレイディアトリアの四公爵家の一つであるリュネブルク公爵家は、アルヴィースの代で一度廃れかけた。

結局、一人娘のマジェンタを当時の皇帝フリードリヒに嫁がせ、その第一子ヴィオラントが玉座を継いだことで地位を保つたようなものだ。

その後、成人を済ませたクロヴィスに公爵の位を譲り、ようやく馴染めない政治の世界から脱出できたアルヴィースは、屋敷に引きこもって悠々自適の隠居生活を楽しんでいる。

「ヴィーヤクロちゃんど血の繋がりがあるなんて信じられないくらい、ピユアなんだもん」

「それは暗に、我々に純粹さの欠片もないと言いたいのだな、スミレ」
「だいたいそんな感じ」

大國を御そうという者は、往々にして純粹でばかりはいられないということだ。

「なるほど、おじいさまから事情を聞いたことは分かりました。それで、ルリを心配して私に何ごとか忠告しに来たわけですか」

「違うよ。クロちゃんが心配だから来たんじゃない！　ねえ、ヴィー？」

「そうだな」

そう仲良く頷き合う兄夫婦に対し、クロヴィスは「はて？」と首を傾げた。

「でも普通、こういう場合は女性の方を心配するんじゃないんですか？」

「ルリさんには、皇太后様や侍女のおねーさん達がいっぱいいるから任せといたらいいし。でも、クロちゃんはさあ、私たちにとつては弟でしょ？　可愛くないけど」

「一言多いですよ」

「だって、百年に一度あるかないかっていうクロちゃんの春だよ？

もしもヘタこいて失敗しちゃったらとか思うと、めちゃくちゃ心配じゃないっ！　ねえ、ヴィー？」

「そうだな。この度の相手は、クロヴィスの今までの相手とはだいぶ毛色が違うようだから、対応を誤れば取り返しのつかないことになるやもしれん。ここは一つ、彼女と年の近いスミレの意見を参考にした方がいいのではないか？」

「もう……兄上まで……」

クロヴィスは困ったようにため息をつきつつ、兄とその妻にお茶を入れるべくようやく椅子から腰を上げた。

二人にソファを勧め、彼らが座つたのを見届け背中を向けたクロヴィスに、いつもより少しだけ硬い少女の声がかかった。

「クロちゃんさあ、あわよくば今回のおデートで、ルリさんをものにしちゃおうとか思ってるでしょ」

それに対し、クロヴィスは手元は茶葉を扱いながら、笑みを浮かべた顔だけ振り向かせて答えた。

「ふふふ、お言葉ですが、ルリは既に私のものです。この私が、目を付けた相手を今さら誰かに譲ってやると思えますか？」

「思わない。クロちゃんに見初められた時点でもうルリさんにはご愁傷様としか言いようがないけど、今言いたいのはそういう事ではなくて……」

「ふむ、ではどういうこと？ はっきりとおっしゃい」

そんなクロヴィスの言葉にむっと口を尖らせたスマレは、隣に座ったヴィオラントにぎゅっとしがみつき、わざとらしく泣きまねをして彼に言いつけた。

「ヴィー、クロちゃんが私にヒワイなことを言わそうとするー」

「それはいけない」

相変わらず表情のない美貌を、けれどスマレにだけは柔らかく緩めて、ヴィオラントは彼女の髪をよしよと撫でながら、クロヴィスに向かって口を開いた。

「これこそ、スマレがそなたに“乙女心の何たるかを勉強しろ”という理由だぞ、クロヴィス。乙女心というのは我々男には到底理解できぬほど複雑で、鋼のように見えて繊細なのだ」

「はあ、面倒くさいですね」

「だが、愛しい娘相手となれば、その面倒さえ愛おしいのだ。そなたに、それを受け止めるだけの器と覚悟はあるのか？」

「……」

ヴィオラントにそう言われ、クロヴィスは一瞬口を噤んだ。

自分も、そして兄ヴィオラントも、これまで女性に対して深い想いなど抱いたことがなかったように思う。

兄は皇帝という立場上、その権力と美貌にたかる女達に多くを望みはしなかったし、許しもしなかった。

同じく、皇族であり宰相という皇帝に次ぐ地位に就いたクロヴィスも然り。

けれど??兄は、スミレという存在を見つけて変わった。

彼女を全力で愛し、彼女のためには如何なる面倒ごとをも厭わず、その凝り固まっていたはずの無表情さえ動かして見せた。

兄にとつてのスミレが唯一無二の存在であることは、クロヴィスから見ても疑いようもない。

では、自分にとつてのルリが、兄にとつてのスミレに匹敵するのかと問われれば、すぐには答えることはできない。

何故なら、クロヴィスにとつても、何もかもが初めてのことなのだ。

リユネブルク公爵として、彼女が己の相手にふさわしいかと問われれば、否と答えるだろう。

廃された侯爵家の庶子であり、今はただの侍女でしかないルリを迎えたところで、リユネブルク家が得るものは何もない。

あるいは、結婚を前提としない付き合いであるとしても、まだ少女ともいえる年齢の人生経験の浅い彼女との戯れに、クロヴィスが面白みを感じることはまあ無いだろう。

それでも

「……受け止めてみせますよ。面倒などと思うなら、はじめから彼女に拘ったりしなかったでしょうしね」

そう答えたクロヴィスに、ヴィオラントは少しだけ厳しい目をして、さらに問うた。

「今までの、後腐れのない女達とはわけが違うぞ。屋敷に泊めて、公爵の手付きと知れ渡ることになるルリの今後を、そなたは責任を持って守れると言えるのか？」

「もちろんです。そうでなくば、屋敷に招待したりしません」

それに対し、クロヴィスがきつぱりと即座に答えると、ヴィオラントは幾らかほっとしたように眦を緩め「そうか、ならばよい」と穏やかに告げた。

「しかし、この年になって、女絡みで兄上に心配されることになるとは思いませんでした……」

「許せ。幾つになろうと、そなたは私の弟に変わりない。余計な世話と知りつつも、心配してしまうのはどうにもならん」

「はあ、まあ、嫌じゃないんです。ちょっと……照れくさいだけで」

「そうか」

「はい」

そんな兄弟のやりとりを、スマレは黙って夫の脇にペタリとくっ付いて見守っていた。

ヴィオラントは、そんな彼女の肩を抱くようにして撫でて言う。

「スマレも、これでいいな？」

「うん」

こくりと頷いたスマレからは、ヴィオラントに対する全面の信頼がうかがえる。

ものの例えではなく、文字通り本当に生きる世界を越えて嫁いだ彼女には、今まで常人には計り知れないほどの戸惑いや不安があったのだらうが、それを全て受け止め包み込んで笑顔に変えたのはヴィオラントであらう。

クロヴィスは、そんな兄夫婦の仲睦まじい様子を穏やかな気持ちで眺めながら、では自分には何ができるだらうと考えた。

ルリとの関係は、まだ始まったばかりだ。

いや、よくよく思い返してみれば、クロヴィスは彼女に対する自分の想いを、言葉としてはまだ一言も告げてはいなかった。

それどころか、自分でもどうしてルリにこんなに拘ってしまうのか、正直なところ不思議で仕方がない。

皇太后陛下の侍女であり、先帝に肅清された一族の娘として、ルリという存在は以前から把握していた。

今から十二年前？？クロヴィスが師事していた当時の宰相シユタィアー公爵は皇太后エリザベスの実兄であり、彼がルリ達母子を側に召し抱えると告げた妹に反対したことを憶えている。

彼女達は、当時の皇帝ヴィオラントをはじめ、皇族に恨みや敵意を抱く可能性のある不穏分子として、警戒されても仕方のない身の上であった。

結局、皇太后陛下の必死の嘆願にシユタィアー公爵は折れ、めでたく後宮に居場所を与えられた母娘はその恩を忘れず、どれほど陰口を叩かれようと自暴自棄になることもなく、懸命に主に仕えた。

皇太后とは血の繋がりがこそないものの、実の子と変わらぬ愛情を注いでもらえたと自覚しているクロヴィスにとって、彼女は紛れもなく大切な母である。

その母が面倒を見ている一番年若い侍女であり、また複雑な境遇にもめげずにいきいきと生きるルリには好感が持てた。

しかし、ただそれだけの存在だったはずのルリが、あの日たまたま王宮の庭でスマレに出くわし、執務室の窓から顔を出したクロヴィスの目に映った。

そんな思わぬ偶然が二人を近い距離で引き合わせ、いつのまにかクロヴィスの中でルリは特別な存在へと押し上がって行ったのだ。けれど肝心のルリの方が、彼のことをどう思っているのか。自分の想いさえ伝えていないクロヴィスには知る由もない。

つまり、クロヴィスとルリの関係は、まだ何も始まってさえいないのだ。

そう思い至ったクロヴィスは、ふっとため息をついて「まいりましたね」と呟いた。

「どうしたの、クロちゃん？」

「はい。実を言うと、今までどなたかと真剣にお付き合いをしたことがないので、まず最初になんと言って告白すべきか分からないのですが」

「何を今さらっ！ 告白もなしに、いきなりルリさんを家に誘ったの？」

「順序を間違えましたが、額かせてしまえばこっちのものかと思って。けれどせっかくなので、参考までに教えていただきたいのですが、兄上は何と言ってスマレを口説いたのですか？」

おそらく兄ヴィオラントも、スマレに会うまで誰かを口説くなどという経験はなかっただろう。

美しく尊い彼には、黙っていても女の方から寄って来て、全てを差し出してきたのだから。

今のクロヴィスと同じように、初めての感情に突き動かされた兄は、いったい何と言ってこの不思議な少女の心を手に入れたのだろうか。非常に興味深いところであった。

ところが……

「……………」

「……………」

クロヴィスの言葉を聞いたヴィオラントとスミレは、「えっ？」
と言葉に詰まったかと思うと、互いに顔を見合わせてしまった。

そして

「ないよね、そんなの」

「そういえば、そうだな」

彼らはお揃いの紫の瞳を瞬いて、なんでもないことのようにその
のたまった。

「しいていうなら、シユタイアー公爵の前で結婚しようと言ったこ
とが、最初の告白になるのだろうか」

「え〜……それは、つまり。がつり身体の関係も済んだ後ってこ
とじゃないですか。しかも、まず口にしたのが“結婚”って……い
きなり飛躍しすぎじゃありません？ 誰ですか、私に順序を大切に
しろとか説教を垂れたのは。ねえ、義姉上さま？」

「臨機応変っていう素敵な言葉も教えておいてあげるよ」

「都合のいい言葉ですね。もう……まったく参考にならないじゃな
いですか」

クロヴィスはそう言って、呆れたようにため息をついた。

瑠璃とケーキ1

「ルリ、そろそろ焼けそうよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

自室にこもっていたルリにそう声をかけてくれたのは、後宮の調理場に入りにする侍女の一人だ。

未成年の見習いの者を除けば、皇太后付きの侍女ではルリが一番年下で、他の侍女達は全員先輩にあたる。

朝早く起き出したルリはこの日、特別に調理場のオーブンを一つ借り切ることを許された。

そうして作っていたのは、手みやげにするためのケーキである。焼き上がりまでの時間に、彼女はもう一度自分の荷物をまとめ直していたのだった。

ルリはまだ、本当は自分は夢でも見ているのではないかと思っている。

そうやってついつい現実逃避をしてしまいたくなるほど、ここ数週間でルリの生活はめまぐるしく変化した。

あの日 街への使いの帰り道、たまたま近道を思い立ったことで、彼女の運命の歯車は突然大きく回り始めたのだ。

クロヴィス・オル・リュネブルク。

大国グラディアアトリア宰相にして、四公爵の一人。

現皇帝ルドヴィークの兄であり、前皇帝ヴィオラントの弟。

そして、ルリが最も敬愛する主人、エリザベス皇太后陛下にとっても、血の繋がらない息子の一人。

そんな、ルリにとってはまさに雲の上のような存在であるクロヴィスの屋敷に、彼女は今日明日と招待されているのだ。

四角く頑丈なトランクには、ルリの意に反してたくさんの物が詰められた。

皇太后陛下からは、せつかくの機会だからと何着も衣服が贈られ、ルリが今着ている訪問着も彼女からいただいたものだ。

姉侍女達からも、それぞれお気に入りのお飾りや化粧品など、たくさんのお饞別が集まった。

そして、二日ほど前にひよっこりと顔を出した少女からは、何だかとても綺麗な紙の袋をいただいた。

彼女 スミレは、ルリとクロヴィスが親密になるきっかけを作った人物で、偉大な先帝陛下に溺愛される奥方ながら、実に親しみやすい愛らしいひとである。

彼女にももらった紙袋の中身は、「サプライズだから、直前に開けてね」との言葉に従って、まだ確かめてはいない。

ルリはこの後、執務室で用事を済ませてから迎えに行くと言えよこしたクロヴィスに連れられ、リュネブルク邸に向かうことになっている。

彼を待っている今の状態が、スミレの言う“直前”にあたるのではないかと思ひ、ルリは少しワクワクしながらその封を解いた。

袋の中には、柔らかで上質な手触りの布が、綺麗に折り畳んで入っていた。

生地が透けているので、イブニングドレスを着た時などに肩に羽織るような、大判のストールではなかるうかと検討をつけ、ルリはそっとそれを袋の中から取り出した。

その時、細い紐でできた輪っかが指に引っ掛かり、「あら、これは何かしら？」と、二つあったそれを両手に持って掲げ、生地を広げて見た。

すると

「おや、それは何ですか？ ルリ」

「えっ……?」

いつの間に入ってきたのか、ルリのすぐ真後ろから聞き覚えのある声がかかった。

びっくりと驚いたルリが慌てて振り向くと、案の上宰相クロヴィスが背後に立っていた。

かっちりとした外出着を着込んだ彼は、実に洗練された立派な紳士で、子供っぽさの抜けきらない自分を自覚しているルリにとっては、ひどく遠い存在に思えた。

しかし、そんな思いを知って知らずか、クロヴィスは突然長身を折り曲げてルリの耳元に顔を近づけたかと思うと、甘く艶っぽい声で囁いた。

「驚きました。あなたは意外に大胆だ。今夜……私のためにそれを着て下さるうと?」

「あ、えっ? ひゃっ……!!」

耳にかかる吐息に顔を真っ赤にしたルリは、クロヴィスの言葉に不思議そうに首を傾げ、それから彼の視線を追って自分の手元を見ると、飛び上がった。

手触りのいい大判のストールだとばかり思い込んでいた物は、実は透けた白い生地の子ビードールだった。

つまり、相当色っぽい感じのランジェリーだったのだ。

それを認識したとたん、ただでさえ赤くなっていたルリは、湯気が出そうなほど耳まで真っ赤に染まった。

「ちっ、違いますっ! これは私のものではなくて! そのっ、あのっ……」

慌ててベビードールを胸に抱きしめ、クロヴィスの視線からそれ

を隠したルリは、彼を見上げて言い訳しようと躍起になったが、上手く言葉が見つからずしどろもどろ。

ついには混乱して、その名のごとく瑠璃色の瞳をうるうるさせ始めた彼女に、クロヴィスは苦笑を返す。

「失礼しました、冗談ですよ」

「……クロヴィス様」

「どうせそれをよこしたのは、私のちっちゃな義姉上あたりでしょう?」「」

「あの……」

「あの方のやりそうなことだ」

クロヴィスはそう言うと、優しい仕草でルリの手からベビードールを取り上げ、ささっとそれを器用に置く。

そして……

「あつ、あのっ……?」

「はい?」

戸惑うルリに眩しいほどの笑顔を返しながら、当たり前のようにそれを彼女のトランクの中に詰め込んだ。

(も、持っていかなくちゃいけないんだ……あれ……)

そうして、スケスケ下着の衝撃からいまだ立ち直れていないルリをよそに、中身がいっぱい詰まったトランクをひょいと持ち上げると、クロヴィスは彼女を振り返った。

「では、行きましようか。ルリ」

そこでようやく我に返ったルリは、大切なことを思い出した。扉に向かって歩き始めたクロヴィスを呼び止めようと、思わず手を伸ばして彼の袖をきゅっと掴んだ。

しかし、すぐさま無礼に気づいて、慌ててその手を引っ込める。

「しっ、失礼しましたっ！」

「いいんですよ、あなたなら。それで、どうかしましたか？」

「あの……」

「ああ 分かりました」

すると、緊張でいまだすらすらと言葉の出ないルリに何を思ったのか、勝手に一人で納得したように頷いたクロヴィスは、トランクを持っていない方の手で彼女の手を掴んだ。

「っ!?」

「手を繋いでほしいのでしたら、遠慮せずにそうおっしゃい。まったく、可愛いですねえ」

「ちがっ！ ちがちがちがっ……」

「血なんて出てませんよ。大丈夫、柔らかくてすべすべとした、白魚のような手だ」

「ちがうんですっ!」

ルリと手を繋いだクロヴィスは、柔らかくて小さなそれを大事そうにそっと握ると、ひどく満足げに微笑んで歩き始めた。

その後、ケーキを焼いていることを何とか伝えたルリだったが、何故か繋いだ手を放してはもらえず、彼に手を引かれたまま自室から調理場まで移動した。

もちろん、通ってきた後宮の回廊には先輩侍女達の目もたくさんあって、自分達に集まる視線にルリはもう縮こまるしかない。

一方、鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌な宰相閣下は、滅多に足を

踏み入れることのない後宮の調理場に到着すると、もの珍しそうに辺りを見回していたが、ようやく手を放してもらえたルリがオーブンに駆け寄ると、ゆっくりとその後を追った。

「おや、いいにおいですね。何のケーキですか？」

「ジンジャーと、キンカンという果実のマーマレードを入れたケーキです」

「キンカン？」

「あの……先日、スマイレ様にいただきました。お国の柑橘類の一種で、皮ごとマーマレードにして食べられると」

そう言つて、スマイレがさっきのベビードールと一緒に渡したのは、小さな小さな可愛らしいオレンジの赤ちゃんのような果実だった。

金柑は生食もできるし、果皮のついたまま甘く煮ても美味しく食べられ、喉の痛みや咳に効果があるといわれる民間薬としても知られているらしい。

グラディアトリアでは見たことのない種類だが、植物に造詣の深いレイスウエイク大公爵が、奥方に請われて屋敷の庭園で栽培しているのだという。

「今日の義母上のお茶請けですか？」

「いえ、あの……、リユネブルク家の皆様に、お持ちしようかと思つて……」

「我が家に？」

「は、はい……」

焼き上がったばかりのケーキを型から抜くと、ルリは残してあった金柑のマーマレードをその表面に塗った。

すると、光沢が出て艶やかになり、実に美味しそうな姿に仕上がった。

「私、どんなものをお持ちしたらいいのかわからなくて……」

手慣れた様子でケーキをそつと箱に詰めながらそう言うルリに対し、そんなに気を使う必要はなかったのにとクロヴィスは思ったが、それではルリ自身が納得いかないようだった。

「私が唯一褒めていただけなのは、お菓子作りだけです。だから、お口に合うかどうかは分かりませんが、心を込めてお菓子を作ってお持ちするのが、一番私らしい手みやげになるのではないかと思いました」

まだほかほか湯気を残すケーキは、湿気がこもらないように気を配りつつ、箱の上から薄い布で柔らかく包んだ。

そんな様子を黙って眺めていたクロヴィスに、ルリは少し不安になった。

「あの……失礼でしょうか？」

「うん？ 何がですか？」

「料理人でもない私が、お菓子を手作りしてお持ちするなんて……」

よくよく考えてみたら、突然屋敷を訪れたよその侍女の手作りしたものなど、口にするのは気持ちが悪いかもしれない。

皇太后陛下たちは喜んで食べてくれるが、それは彼女達が幼い頃からルリを知ってくれているからであって、クロヴィスやスマレのようにパクパク食べてくれるの方が珍しいのではなからうか。

そう思うとひどく不安になって、つい足元に視線を落とすようになったルリだったが、大きな掌に包まれていた手がぎゅっと握られ、はっとなった。

ケーキの箱を持ったルリは、再びトランクを下げたクロヴィスに

手を引かれて後宮を出て、表に待たせてある馬車に向かっているところだった。

もちろん、その前には皇太后陛下の私室に顔を出して、二人仲良く暇の許しを得てきていた。

「失礼なことなんて何もありませんよ。あなたのお菓子がおいしいのは、私もよく知っています。プロが作ったものにもまったく退けをとりません。自信を持ちなさい」

「あ、ありがとうございます……」

「それにね、どんな素晴らしい物を金を出して揃えたとしても、心を込めて手作された贈り物に敵うはずがないんですよ」

ルリの手を包む温もりは、たおやかだった母のそれとは違い力強く、それでいて母に負けないほど優しくかった。

同じように優しい声が、顔を上げたルリの上にさらさらと降り注ぎ、その向こうには柔らかい笑みをたたえたクロヴィスの顔。

細いフレームの眼鏡の奥のいつもは伶俐な瞳を細め、愛おしげにルリを見下ろしていた。

ルリは、先ほどの恥ずかしさとはまた別の熱が、己の頬に集まるのを感じた。

「祖父も、あなたが来るのをとても楽しみにしているようです。その手作りのケーキを見たら、きっと喜びますよ。着いたらお茶にして、一緒にいただきますでしょう」

「はい、クロヴィス様」

そうして、待たせてあった馬車に乗り込んだ二人は、一路リユネブルク公爵邸に向かって出発した。

ルリの膝の上に大事に抱かれたケーキは、道中箱の蓋を少しだけ開けて湿気を逃がし、目的地に着く頃にはいい具合に冷めて、味も

馴染んで食べごろとなっていた。

瑠璃とケーキ2

からからと、石畳の街道の上を車輪の回転する音がする。

午後を過ぎた街の喧噪は、窓を閉めたリユネブルク家の馬車の中までは、わずかに届くのみ。

流れていく車窓の景色をぼんやりと眺めながら、ルリはかすかな既視感にとらわれていた。

ルリが馬車に最後に乗ったのは、いつのことだっただろうか。

父侯爵が処刑されたのは、彼女が六歳の頃だった。

それまでは、母とルリは城下街の一角に屋敷を与えられて住んでいたが、婚外の妻子である二人が侯爵の屋敷を訪ねられるはずもなく、時々彼が会いにやってくるのをただひたすら待つばかりの生活だった。

だから、裕福だった頃も母と馬車で出掛けた思い出など数えるほどしかない。

さらに、父が亡くなって財産を没収され、皇太后陛下のお側に寄せただいてからも、母は心労からか体調を崩すことが多くなって外出することがまったくなくなった。

ルリもまた、外に出て買い物や散策を楽しむよりも、部屋で静かに本を読んでいる方が好きだったので、私用で街に出たことなどなかった。

そうして考えてみれば、ルリが最後に馬車に乗ったのは、屋敷を引き払って王城に向かう時だったと思いついた。

哀れで無力な母子を助けるために、優しい皇太后陛下がよこして下さった馬車に、あの時のルリもこうして座って車窓の景色を目で追っていた。

ルリは幼かったから、その時のことを全部はつきりと憶えている

わけではない。

ただ、おぼろげな記憶しかない父は死に、それを知らされた日からずっと泣いている母が、その時もまだ向かいの席で涙を流していたことだけは、鮮明に憶えている。

あの時の母の涙は、やはりまだ父を想ったものだったのだろうか。

それとも、お優しい皇太后陛下のお心遣いに対する感謝の涙だったのだろうか。

母が亡くなった今となつては、それを確かめる術は残されていないが、どちらにしろ、漠然とした不安がその時ルリの幼い心に深く根付いたことだけは確かだった。

本当は、ルリも怖くて泣きたかった。

それでもルリは、泣くばかりの母を笑顔で励まし、陰口に唇を噛んで耐え、自分がこれからどうなってしまうのかも分からぬ不安を胸に押し込めた。

やがて母は亡くなり、ルリは成人して正式に皇太后陛下の侍女になった。

その頃には、もう彼女の生い立ちを持ち出して貶めようという輩は消え、優しい主人と頼もしい姉侍女達との毎日は、ルリにとって随分と心地よいものとなっていた。

しかし、そうして穏やかに過ごしている時に限って、かつて抱いた漠然とした不安が頭をもたげてくる。

母方の親族は健在だが、汚職で処刑された父侯爵と関わるのを嫌って、ずっと昔に縁を切られてしまっている。

母を亡くしたルリには、もう家族はどこにもいないのだ。

もちろん、親代わりに後見して下さる皇太后陛下の存在は大きい。が、国母ともいえる彼女を家族と思えるほどの度胸はルリにはない。そうして、こんなにいろいろと皆が良くしてくれるというのに申し訳ないと思いつつも、時々どうしても寂しくて仕方のない時がある。

遠慮なく身を委ね、甘えを許して包み込んでくれる“家族”が、恋しくて恋しくて堪らない時があるのだ。

「何を、考えているのですか？」

「え……？」

突然声をかけられて、ルリははっと我に返った。

向かいの席から、柔らかな瞳で彼女を見守ってくれていたのは、この馬車の持ち主であり、これからルリが訪問することになるリュネブルク公爵家の当主クロヴィスだ。

一介の侍女にとっては雲の上の存在ともいえる宰相閣下と二人きりで馬車に乗っているというのに、つつい物思いに耽ってしまつた自分の無礼を、ルリは思いっきり恥じた。

「し、失礼いたしましたっ！」

「いいんですよ、楽にしています。ただ、最初は楽しそうに外を眺めていたのに、途中から急に表情がなくなったので、気になりましたね」

「えっ……？」

ルリは元々口数の多い方ではないし、クロヴィスも宰相という職業柄口は達者だがおしゃべり好きというわけではない。

まだそうそう碎けた仲でもない二人が馬車に乗り込んで、普通ならば沈黙が重苦しく感じたりするものだ。

しかし、クロヴィスとルリは波長が合うというか、意外にも言葉のない二人っきりの空間は心地よく、その安心感がルリを過去の記憶へと誘つたのだらう。

ただ、辿り着いた記憶は楽しいものではなく、ルリは己の心の奥に潜む寂しさと思い掛けず対峙することとなった。

それから自分を守るために、一瞬全ての感情に蓋をした。

それを、クロヴィスには見られていたようだ。

「あなたも、かつての私の兄と一緒にですね。己の思いを閉じ込めようとする時、表情を消してしまおう」

「私は……」

「いいんですよ。それを、今すぐ無理矢理暴こうとは思っていません。ただ、せつかく一緒にいる時間を手に入れたんですから、私の方を向いてみませんか？」

クロヴィスの言葉に、ルリは不思議そうな視線を返した。

そういう風に、彼を媚も打算も匂わせない無垢な視線で見つめる女は稀であって、そこがまたクロヴィスがルリを気に入る要因にもなったのだということは、彼女は知らないだろう。

そもそも自分が天下の宰相閣下の馬車に乗せられて、過去の恋人の誰ひとり立ち入ることを許されなかったリユネブルク家に招待されることの意味を、ルリは身に余る光栄と恐縮するばかりで深くは考えていないだろう。

まだそれほど多く互いのことを知っているわけではないのだから、それは仕方のないことなのかもしれない。

そう思ったクロヴィスは、向かいの席から手を伸ばして、ルリの膝の上に大事に抱かれていたケーキの箱を座席に移動させると、あっ、とそれを追おうとした彼女の小さな手を捕まえた。

「ねえ、ルリ。私はね、職業柄あなた自身のことも大体知っていますんですよ。変な意味ではなくてね」

「……」

「でも、あなたは私のことをあまり知らないでしょう？ 家族構成と職業以外に、何か知っていますか？」

そう問われると、ルリは黙り込むしかない。

彼はルリの敬愛する皇太后陛下の息子で、この国の宰相で、現皇帝の兄で前皇帝の弟で、それから……

瞳を泳がせる彼女の心の内を読んだのか、クロヴィスは苦笑して「ほらね?」と言った。

「だから、これからたくさん知って下さい。私について何か質問はありませんか? ほくろの数とか、興味ありますか?」

「それは……ちょっと……」

冗談を織り交ぜつつ、ルリの緊張を解すように語りかけるクロヴィスの声は柔らかく、握られた両手はとても温かかった。

それにほつとどこか安堵したルリは、正面の彼の端正な顔を見上げ、そういえば……とあることを思った。

「あの……」

「はい?」

「実は、眼鏡を外したお顔を、まだ拝見したことがありませんでした」

「おや、そうでしたか?」

クロヴィスは、いつも細いフレームのスマートな眼鏡をかけていて、それがとても似合っている。

しかし今言った通り、ルリはまだ彼の素顔を見たことがなかったのだ。

それに対して彼は、「いいですよ、ご覧ください」と答えたとおっしゃったら、何を思いついたのかにやりと笑った。

「にこり」ではなく「にやり」であったのは、よく物事に鈍いとされるルリでも気づいた。

彼女が嫌な予感に思わずうつと仰け反ると、クロヴィスは握っていた両手に力を込めて逆に引き寄せてしまう。

そして、再び唇の端を引き上げて言った。

「その代わり、ルリが眼鏡を外すんですよ？」

「えっ……!?!？」

「ほら、どうしました？　あなたが見たいって言ったんですよ。早く外して下さい」

ん、と顔を突き出して瞳を閉じたクロヴィスに、ルリは何だかとてもなく恥ずかしい気分になった。

けれど、「ほら早くしなさい」と催促されて、結局ルリは言われた通りにおずおずと彼の眼鏡の縁に指を添える。

そうして、繊細なフレームを壊さないようにそっと震える指で摘んで引き抜くと、彼の艶やかな金髪をさらりと揺らしてそれが外れた。

「……………」

ひどく近く顔を近づけ合っていることも忘れて、ルリは思わず目の前の美貌に見蕩れる。

やがてそっと開かれた瞳は、血の繋がりは無いというのに、ルリの敬愛する皇太后陛下とそっくりの澄み切った空のような美しい青であった。

けれど、綺麗なと眩きかけたルリよりも一拍早く、クロヴィスの薄い唇が動いた。

「綺麗な瞳ですね。汚れない宝石のようだ」

それが自分の瞳を指しているとは、すぐには気づけなかったルリがきょとんと首を傾げると、クロヴィスは瞳を細めて微笑んだ。

「どうですか？ 眼鏡の時とは印象が違います？」

「あ、はい、あの……、眼鏡をかけていらつしやらない方が、お優しいお顔に感じます」

「ほう、そんなもんですか」

「あと……お兄様に、よく似ていらつしやいます」

そうルリが言ったとおり、髪や瞳の色こそ違うが、やはり母親が同じクロヴィスとヴィオラントの顔の造形はよく似ている。

それを聞いたクロヴィスは、一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに「そうですか」と言っただけで破顔した。

今でも兄を深く敬愛する彼は、ルリの言葉が素直に嬉しかったのだろう。

そんなクロヴィスを見つめ、彼が兄ヴィオラントを含めた家族をとても愛しているのだと再確認する。

それはとても微笑ましいことである。なのに？

(いやだっ……私……)

とたんに、ルリは天涯孤独の我が身に愕然とした。

兄も弟も姉も母も、そしてスミレのような新しい家族もいるクロヴィスが、その瞬間とてつもなく羨ましくなった。

しかもただ羨むだけでなく、それは嫉妬のように醜い感情に成り代わろうとし、そう気づいたルリはひどく自分が恐ろしくなって、それを封じ込めようとした。

クロヴィスに見蕩れていた瞳を伏せ、どす黒い感情が頭をもたげるのを阻止しようと、彼に包まれていた掌を引き抜き胸を抑えようとした。

しかし、それを許さぬ強い力で手を握りしめられたと思ったら、いつの間にか離れていたもう片方の彼の手が、ルリの顎を捕えた。

「???ルリ」

ぐつと顎を掴まれて、俯こうとした顔を無理矢理上に向かされた。それに驚いた声を上げる間もなく、開きかけたルリの唇は何者かによって塞がれてしまう。

もちろんそうしたのは、クロヴィス以外の何者でもない。

??ルリにとっては、生まれて初めてのキスであった。

そう彼女が認識する前に、優しく押し付けるだけの唇はそつと離れて行ってしまったが、おかげで呆然と見上げる形で固まったルリに、クロヴィスは不敵な笑いをたたえた顔で言った。

「私の前で、もう感情を押し込めるのはやめなさい。あなたが表情を消す度に、私はそれを阻止します」

「なっ……えっ……?」

「つまり、私の前でしけた面をするようならば、その度に唇を奪われると覚悟しなさいねってことですよ」

「っ?!?!?」

「おぼえておきなさいね」

そうして、ようやくクロヴィスはルリの顎と両手を解放し、眼鏡をかけて何食わぬ顔で座席に座り直した。

もちろんルリは、その後時間差で恥ずかしさが爆発して真っ赤になり、彼はそれを見て「ふふふ」と実に楽しそう。

そんな相手の余裕すぎる態度を恨めしく思いながら、傍らに除けられていたケーキの箱を膝に抱え直し、耳まで真っ赤にしてそれをギューっと抱きしめていたルリは、そこではたとあることに気づいた。

そして突然、水を得た魚のようにぱあつと顔を輝かせると、頬を薔薇色に色付かせたまま声を上げた。

「あのっ、さっきのお話ですがっ！」

「うん？ 何ですか？」

「私がクロヴィス様の、家族構成と職業以外に知っていること、一つありました」

「おやおや、何でしょう？」

そんな少女の様子を、可愛らしいなあと思いつつ眺め、クロヴィスは長い脚を組みながら先を促す。

するとルリは、膝に抱いたケーキの箱を少しだけ持ち上げて答えた。

「クロヴィス様は、お菓子に目がなくていらっしやいます！」

「おや、バレましたか」

その時の、ルリのいやに得意げな顔が面白かったのか、クロヴィスは思わず盛大に嘖き出していた。

瑠璃とケーキ3

リユネブルク公爵家の屋敷は、王城を挟んでレイスウエイク家とちょうど対極の位置にある。

市街地を過ぎると小さな林に差しかかり、そこはもうかの家の領地である。

やがて、馬車は大きく立派な門をくぐり抜けた。

正面にそびえ立つ大きな屋敷は、先々代が建てたものらしいが、手入れが行き届いていて少しも傷んではない。

屋敷の背後には山が迫り、その昔はたくさん銀が採れたらしいが、今はもう発掘はなされていない。

クロヴィスとルリを乗せた馬車は滑るように敷地を走り、玄関の前で緩やかに停車した。

御者が扉を開くと、クロヴィスはルリの膝のケーキの箱を彼に預け、自分はさっと馬車から降り立ったかと思うと、ルリに向かって片手を差し出した。

「おいで、ルリ」

「は、はい……」

屋敷に近づくにつれ、新たに緊張を募らせていたルリを馬車の中で見守っていたクロヴィスは、彼女を安心させるように柔らかな微笑みかけ、自分の掌に慎ましく載った震える手を力強く握ってやった。

そんなクロヴィスの優しさに気づき、ルリは少し安心したように強張っていた頬を緩めた。

と、その時

パンツ！

パンパンパンツ！

パンパンツ　　！！

「きやつ……！？」

突然、何かが破裂するような大きな音が響いたかと思うと、色とりどりの紙紐と紙ふぶきがクロヴィスとルリの頭上に降り掛かった。とつさに自分の身を盾にして、それがルリに届くのを防いだクロヴィスの視線の先には、にこにことお揃いの笑みを浮かべた見知った顔が並んでいる。

クロヴィスの祖父であり、前リユネブルク公爵アルヴィースをはじめ、この家の住人が全員並んで玄関で出迎えてくれたらしい。

クロヴィスは髪に絡んだカラフルな紙くず達を振り落とすと、義姉スミレが「魔王だ魔王だ」と評する笑みを浮かべて、一番先頭にいた祖父に向かって口を開いた。

「ただ今戻りました、おじいさま。盛大な歓迎をありがとうございます
ます」

「おかえり、クロヴィス」

しかし、いろいろ鈍いと有名なアルヴィースは相変わらずにこにこしたままで、後ろの使用人達の顔色が冴えなくなったことにも気がつかない。

クロヴィスはそんな一同を舐めるように見回してから、彼ら全員が手に持っている物体に首を傾げて言った。

「それで、これは一体何の真似です？」

大人の掌に収まるほどの大きさの円錐の物体で、周りにはカラフルな紙が貼られている。

こちらを向いた円錐の底がポツカリ開いていることから、先ほどの紙くずどもはその中から飛び出したものだろう。

クロヴィスの問いかけに、アルヴィースはよくぞ聞いてくれたとばかりに、笑みを深めて誇らしげに答えた。

「これこそが、スミレの国における最大の歓迎アイテムなのだそう
だ」

「……まあ、あのちびっ子おねえちやまの仕業ですか……」

「見てご覧、クロヴィス。この後ろの紐を持つてだな、こうして上向きにかまえて……この時の角度が重要らしいのだ。それでだな、あとは一気に紐を引っ張って」

「分かりました分かりました。面白いおもちゃをもらえてよかったですね。でもそれ、中に微量の火薬が入っているようですから、取り扱いには注意して下さいね。あと、人に向かって打っては駄目です」

「ああ、しまった！ それはスミレにも注意されていたことだった。緊張のあまり、すっかり忘れていた！」

つまりそれは、スミレが実家のある世界から取り寄せた、典型的なパーティーグッズであるクラッカーだった。

もちろん、グラディアトリアには存在しない代物である。

わたたと慌てる祖父を眺めながら、先日スミレも言ったことだが、この人と自分や兄に血の繋がりがあんなって時々信じられない……とクロヴィスは思った。

そんなドジッ子属性を見せた愛すべき祖父アルヴィースは、クロヴィスの後ろでおろおろとしていたルリを見つけると、困ったように眉を八の字に言った。

「びつくりさせてしまつてすまなかつたね、お嬢さん」

「あ、いえ、大丈夫です！」

「ではでは、皆の衆。整列！」

そうして、畏まるルリを前に、アルヴィースの号令でリユネブルク家の一同がずらりと並んだ。

ルリはその光景を見て、過去にたった一度だけ、父侯爵の屋敷に連れていかれた時のことを思い出した。

その時もこうやって、大勢の使用人が玄関で出迎えてくれたと思うが、彼らは人形のような無表情を顔に貼付けて、黙って頭を下げていた。

そして、父について通り過ぎたルリの背中に突き刺さるのは、“妾の子”という蔑みの視線ばかりで、幼い身でも自分が歓迎されていないことがよく分かったものだ。

けれど、今ルリを迎えるのは、過去の記憶とはまったく対照的な視線。

「ようこそ、リユネブルク家へ！」

ずらりと並んだ全ての顔には柔らかい笑みがのつていて、ルリは本当に自分が歓迎してもらえているのだと実感した。

「……………ね？ 緊張して損したでしょう。まったく、どれだけあなたが来るのを楽しみにしていたんでしょうね、うちの連中は……………」

クロヴィスはそう苦笑しながら、ルリの背に優しく手を添えて、屋敷の中へと促した。

ところがその時、ふとルリの視線の端に、物陰からこちらを見つめる小さな男の子の姿が映った。

ルリが思わず立ち止まると、クロヴィスは「どうしました？」と

彼女の顔を覗き込んだ。

「あ、あの、男の子が……」

「ああ、紹介しますよ。 ロイズ、こちらに来なさい」

「……」

ルリの視線を追って男の子を見つけたクロヴィスは、手招きをして彼を呼んだ。

すると、男の子は幼さに似合わぬ硬い表情をして、とことことやってくる。

柔らかそうな明るい茶色の髪とヘーゼルの瞳の可愛らしい子供に、ルリの頬も自然と緩んだ。

「お屋敷の、どなたかのお子さんですか？」

「ええ、私の息子」

「ええっ……!？」

グラディアトリアの宰相閣下はいまだに未婚である。

まさかの隠し子発言っ!？ と、ルリはびっくり仰天目を見開いて、クロヴィスを振り仰いだ。

けれどそこにあったのは、人の悪い笑みを浮かべた美貌。

「 のように可愛がっている子供ですよ」

「……クロヴィス様」

「ふふふ、ルリは期待通りの反応をくれるから楽しいですねえ」

「……」

からかわれたと分かったルリは、頬をかつと赤らめて恨めしそうにクロヴィスを見上げたが、彼の笑みを深めただけだった。

「ロイズはね、うちで雇っていたメイドが生んだ子供なんですけど、母親が去年病で亡くなりましてね。父親も分からず身寄りがないものですから、リユネブルク家で面倒をみることになったんです」
「まあ……」

「しっかりした子で、おじいさまのお守りにちょうどいいんです。

ロイズ、お客様にご挨拶しなさい」

「……こんにちは」

「こんにちは。はじめまして、ロイズ君。ルリといます」

クロヴィスに促されて、いかにも不承という様子でロイズはルリに挨拶をした。

ルリが腰を落として視線を合わせ「おいつつですか?」と問いかけると、また仕方なしにという様子で「……五歳」と小さく答えた。しかし、彼は突如唇を噛んで顔をしかめたと思ったら、ギツとクロヴィスを睨みつけた。

「クロヴィスさまのうそつきっ。つぎにお帰りの時は、ぼくにチェスを教えてくださるお約束でしたっ!」

「うん? もちろん、約束を違える気はありませんよ?」

「うそだっ! だって、女の子とお帰りだものっ! その子とばかり遊ぶ気なんだものっ!」

「うつむ、まあ確かに、ルリと遊ぶ気も満々ですが……」

「ク、クロヴィス様……」

「女の子なんか、女の子なんかっ、だいつきらいだっ……!!」

「あ ころら、ロイズ」

小さなロイズはそう吠えると、クロヴィス達に背を向けて、たつとどこかに走り去ってしまった。

「やれやれ……おじいさま、ロイズに何かおっしやいました?」

「クロヴィスの大切な女性がいらっしやるから、今回は遊んでもらえないよとは言ったよ。一世一代の勝負どころだからね」

「……何の勝負だつて言うんですか」

「君がかわいい人を手に入れられるかどうかは、リユネブルク家としても大きな問題だからね。つんつんとプライドが高くて面倒くさい、綺麗なだけの女主人はいらないよ」

そう答えたアルヴィースは、ばちりとルリに向かって片目を瞑ってみせる、お茶目な紳士。

彼の淡いブロンドは、光りの加減では先帝陛下の銀髪を彷彿とさせ、優しく細められた瞳の色は宰相閣下と同じ空の色。

年齢を重ねていても、確かな血の繋がりを感じさせる端正な顔立ち、彼の孫達ととてもよく似た雰囲気だった。

「さあ、こんなところで立ち話もなんだ。中に入ってお茶にしよう」

そう言ったアルヴィースの言葉に、ルリは手みやげに持ってきたケーキの箱を預けっぱなしであることを思い出した。

慌てて背後を振り向くと、馬車の脇でにこにこして見守っていた御者の手にそれはなく、いつの間にか隣に立つクロヴィスの片手に移っていた。

ルリの視線を追ってケーキの箱に辿り着いたアルヴィースは、またにこりと笑みを深める。

「スマレがね、君の作るお菓子はとても美味しいから楽しみにしておけつて言つてたんだよ」

「そ、そのように、勿体ないお言葉を……」

「うちの義姉上は、ああ見えてもお世辞は言わないですよ。私も焼きたてを拝見したので、ご馳走になるのが楽しみです」

「ク、クロヴィス様まで……」

ルリにとっては、菓子作りが唯一自信を持てること。せつせとハードルを上げてくれたスマレとクロヴィスをこっそり恨みつつ、ルリは期待に胸を膨らませるアルヴィースに向かって言った。

「お会い出来て光栄です、アルヴィース様」

「こちらこそ、会えて嬉しいよ。よく来てくれたね。??ところで、クロヴィス」

「はい、何でしょう?」

「そろそろ……彼女に名前を聞いてもいいかな?」

アルヴィースにそう言われ、ルリは自己紹介どころかまだ名乗ってさえいなかった自分の失態に気づいた。

おそらく、クロヴィスやスマレとの話題に上ったルリの名は、彼はずでに知っているに違いない。

それでも、一介の侍女にわざわざ名乗る機会を与えてくれたのは、彼の気遣いに相違ない。

「し、し、失礼しましたっ!」

「いいんだよ、落ち着いて。では可愛らしいお嬢さん、この爺にも名前を教えてくださいるかな?」

爺だなんて……と思いつつも、ルリはスカートを摘んで淑女の礼をして、名乗った。

「ルリと申します」

皇太后陛下が用意して下さったのは、ルリの瞳を優しく薄めたような淡い色合いのワンピース。

光沢のある手触りのいい生地に、襟元や袖には繊細なレースが飾られて、一目で上等とわかる代物だ。

ルリ自身も、名のある侯爵に見初められたほどの美しい母譲りの整った容姿をしている。

髪はありふれた栗毛だが、皇太后陛下は艶やかでとても綺麗だと撫で、深い青の瞳は宝石のようだと大公爵夫人が褒めてくれた。

侍女のお仕着せから上質な訪問着に着替えたルリは、どこからどう見ても美しい貴族の令嬢に映った。

だが、彼女が名乗ったのは、家名も血名も何もない、ただの“ルリ”だった。

それは、罪人として処刑された父とも、母と自分を見捨てた母方の実家とも、完全に決別したのだという、ルリの頑な意思の表れである。

ルリは、愛する母にもらい、敬愛する皇太后陛下に親しまれ、可愛らしい大公爵夫人に素敵と褒められた“ルリ”という名ただ一つで生きていくつもりであった。

“ルリ”以外の何者にもならない??そう心に決めていた。

瑠璃とケーキ4

仕上げに塗った金柑のマーマレードで、ケーキの表面は艶やかでいてしつとりとしている。

すつとナイフを入れると、ほのかに香るのはジンジャーとラム酒。ケーキの生地には、ラム酒に砂糖と一緒に漬込んだみじん切りのジンジャーと、もちろんレイスウェイク大公爵家自家製の金柑マーマレードが混ぜ込まれている。

ケーキを切り分けるルリの横では、先ほど彼女とクロヴィスを使用人一同を従えて出迎えた、前リユネブルク公爵アルヴィースが、三つのカップに紅茶を注いでいた。

グラディアアトリア四公爵の一人でもあったアルヴィースだが、彼は昔からこうして自分で紅茶をいれることが多かった。

かつては妻　クロヴィスとヴィオラントの祖母にも、日常的に振る舞っていたらしい。

クロヴィスが自分でお茶をいれるようになったのも、彼の影響が大きい。

「おいしそうだねえ。それに、とてもいい香りがするね」

「ありがとうございます。お口に合えば光栄です」

皇太后陛下の侍女であるルリの職場は、基本女性ばかりで占められている。

何度かクロヴィスの執務室に出入りするうちに、彼の部下の文官たちとも挨拶程度は交わせるようにはなったが、ルリはまだどうにも男性と話すことには慣れない。

特に、アルヴィースのような年齢の男性とは、今まで接する機会がほとんどなかったので、ルリは最初はやはり緊張していた。

実を言うと、ルリの父はアルヴィースと同年代であった。年をとってからルリの母を見初めたので、その頃にはすでに正妻との間の子が生んだ孫もいた。

ルリの父の記憶はひどくおぼろげだが、いつも厳しい顔をしていて、抱いてもらった憶えもないように思う。

一方で、彼女の隣で自分の入れた紅茶に満足そうな壮年の紳士は、端正な顔一面に優しい笑みを浮かべて、それを惜しげなくルリにも向けてくれる。

一瞬、それが父が笑いかけてくれたものと錯覚し、自分の中に亡き父への想いの名残が存在したことに、ルリ自身ひどく驚いた。

ルリが切り分けたケーキは、上等な皿の上に載せられて、ひどく立派になった気分だ。

それに、待ってましたとばかりにフォークを入れて、真っ先に口に放り込んだのは、ソファに座って寛いでいたクロヴィスだった。

「うん、やはり美味しいですね。甘すぎずとても上品でいい」

「ありがとうございます」

「どれどれ」

孫の絶賛に、彼とルリの前に紅茶を置いてやったアルヴィースもケーキを口に含む。

そうして、「これはうまい」と盛大に褒めたたえた。

「キンカンという果実は、私もヴィオラントに種を貰って庭に植えようと思っているんだ。実が生ったらルリにお菓子にしてみらおう」

「気安く彼女を使わないで下さいよ、おじいさま。ルリは皇太后陛下の侍女なのですよ」

ケーキを頬張ってほくほく幸せそうな祖父の言葉に、ルリにお菓子を散々作らせてきた自分を棚に上げたクロヴィスが苦言を返すと、アルヴィースは「おや？」という風に首を傾げた。

「でも、クロヴィスの恋人なんだろう？ いずれうちの子になるんだらう？」

「……!？」

さらりと言つてのけたアルヴィースの言葉は、ルリを飛び上がらせるほど驚かせた。

しかし、今まで一度も懇意にしている女性を屋敷に連れてくることも、ましてや身内に紹介することもなかったクロヴィスが、二十四の歳にして初めてそれらをなした相手がルリなのだ。

アルヴィースが、彼女を孫の特別な女性　つまり結婚を約束した恋人と思うのも無理はないだらう。

家柄云々に頓着しない前リユネブルク公爵にとって、ルリは大歓迎の存在だった。

そんな、滅相もない！　とんでもない誤解ですっ！

ところが、そうルリが叫ぶよりも早く、かちやりと紅茶のカップをソーサーに戻した男が口を開いた。

「ああ、そうですね。まったくその通りです」

「っ!？　クロヴィス様っ！」

またクロヴィスにからかわれているのだと思ったルリは、それはあまりにもお戯れが過ぎると彼を見上げたが、しかし思いがけず真剣な眼差しとかち合うことになっておののいた。

眼鏡の奥の伶俐な瞳はまっすぐにルリを見据え、逸らすことを許さぬ強さであった。

「実はね、何度か義母上にはルリのことをかけあってみたんですがね、なかなか首を縦には振っては下さらないのですよ」

「……え？」

「ほら、ルリは宰相執務室付きの侍女達とも仲良くなったでしょう。だからもういつそ、うちの侍女としてあなたを譲っていただけないかとお願ひしてみたんですよ」

「ええっ？」

「誤解なきように言っておきますが、あなたを物のようにやりとりするつもりだったのではないですよ？ ルリは義母上の侍女である前に、彼女の養い子ですからね。保護者に先にお願ひするのが筋かと思つて」

「そんなっ……恐れ多いことです！ 私のような者が皇太后様の……」

「ですが、義母上にはきつぱりと断られてしまいましたよ。ルリを、よそに働きに出す気はないんですって」

「本当ですか……？」

「ルリを手放すのは、これぞという相手に嫁にやる時だけだともおつしやつてましたよ」

皇太后陛下に母とともに救われ生かされたルリは、少しでも彼女に恩返しをしたいと思つている。

クロヴィスから聞かされた主人の言葉に、ルリは胸が熱くなるのを感じながら、「私も皇太后様以外の方にお仕える気はありません！ 一生お側にお仕えます！」と心の中で返した。

そんなルリの決意を知つてか、クロヴィスは獲物を狙う猛禽類のように鋭く瞳を眇め、眼鏡のレンズ越しに彼女を見据えて言った。

「そついうわけだからね、ルリ。 うちにお嫁においで」

「っ！？」

がちやりつと、ルリの手元でカップが大きく音を立てた。
危うく、せつかく先代リユネブルク公がいれて下さった紅茶を零
してしまうところだった。

そのアルヴィースは、突然の孫のプロポーズに立ち会うことにな
って、「いきなりだね!」とさすがに驚きを隠せない様子。

「こういうことはね、勢いも大事なんですよ。ほら、変に畏まった
方が警戒されるかもしれないじゃないですか。うまく話の流れにの
せた方が、ルリもついつい頷いてしまいかもしれないでしょう。頷
かせてしまえばこっちのものです」

「これこれ、クロヴィス。腹の中から黒い物が漏れ出しているよ。
ちよつとは自重しなさい」

その後、「こういうことはムードが大切なんだよ。せめて二人つ
きりの時に言うとかだなあ」などと、アルヴィースはルリのケー
キを頬張りながら、懇々とクロヴィスに対して説教を始めたが、も
ちろん彼に堪えた様子はない。

それどころか伶俐な美貌には不敵な笑みを浮かべ、長い脚を悠然
と組み替えては、優雅に紅茶に口を付けつつルリを見据えた。

???うんと、おっしやい

クロヴィスの目は、間違いなくそう脅していた。

と、その時???

「 いやだっ! そんなの、だめだよ……!!!」

あまりのことに混乱し、パニックに陥りそうになったルリをはっ

とさせたのは、そんな甲高い子供の叫び声だった。

驚いて扉の方を振り返った彼女の視界に、先ほど玄関から走り去った小さな男の子　ロイズの姿が飛び込んできた。

「こら、ロイズ。扉を開ける前にはノックをなさい」

「クロヴィス様、ひどいよっ！　お嫁さまがいらしたら、もう僕とは遊んでくださらないんでしょっ！」

ただでさえ忙しくて、滅多に屋敷に戻らないクロヴィスが“お嫁さま”を迎えれば、ますますロイズに付き合ってくれる時間が減ると言いたいのだろう。

ロイズはよほど屋敷の主人に懐いているようだ。

そんな彼に、クロヴィスは大真面目に返した。

「そんなことないですよ。昼間ならお相手しますよ、昼間ならね」

「どうして夜は駄目なのとか突っ込みたくなる言い方を、五歳の子相手にしちゃだめだよ、クロヴィス」

「おや、これは失敬」

「ちよつとここにおいで、ロイズ。せつかくだから、君も一緒にお菓子をいただきなさい」

扉の脇で泣きそうな顔をしていた幼い少年は、アルヴィースに呼ばれて逡巡するように視線を泳がせる。

けれど、ルリと目が合うと、とたんにぎゅっと眉をしかめて彼女を睨み付けた。

「その人の作ったお菓子なんて、いらないっ……！！」

ロイズはそう叫ぶと、再びくるりと振り返って駆け出して行ってしまった。

「あ??待って……っ!」

先ほどは見送ってしまったその背中を、しかしルリは今度は追いかけた。

天涯孤独になってしまった幼い彼に、同じ境遇の自分の幼い頃が重なったのだろうか。

ルリにはそれでも母が一緒だったが、あの年齢でその母さえも亡くしてしまったロイズがひどく哀れに感じた。

同情したいわけではない。

ただ、彼の寂しい背中を見たら、ルリは居ても立ってもいられなくなっただのだ。

「放っておきなさい??つて……ああ……行ってしまいましたね」

そんなルリをとめようとしたクロヴィスだったが、躊躇なく部屋を飛び出して行った彼女の耳に、彼の声は届かなかった。

「うむ、メモメモ。“一日目、クロヴィス一世一代のプロポーズをロイズの乱入により有耶無耶にされる”、と」

「ちよつと、何書いてるんですか。一体何のためですか」

「スマレに依頼されたんだよ。クロヴィスのうきうきおうちデートをつぶさに観察して、レポートにまとめて提出するようにってね」

「彼女のデバガメに加担してどうするんです」

「許せクロヴィス。爺は小悪魔に魂を売り渡してしまったんだよ」

「ちよつと、うまいこと言ったみたいな得意げな顔するの、やめてくださいます?」

クロヴィスは、人の不幸を楽しむ祖父をたしなめながら、ルリが消えたドアを眺めて頬杖をつき、深くため息を吐き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7254y/>

瑠璃とお菓子

2011年12月10日02時46分発行